神の厚い情けで、その子は
すこやかに育ち、五歳の頰には
愛らしい薔薇色を帶びてゐた。
その時マイケルは冬の柴林から
手づから一束の若木を伐り、
それに鐵の箍を入れ、
何一つ不足のない立派な羊飼ひの杖を作り
それをルカに與へた。この杖を手にして
ルカは見張として屢々入口や際間に立たせられ
羊の群を喰ひ止めたり、方向を變へたりした。
頑是ないこの子にその役目を命じたのだから
手傳になつたか邪魔になつたかは
誰でも思ひやられよう。
それがため、父から必ずしも
賞讃の辭のみは貰はなかつたらう。
固より杖や聲や顏付や脅迫的身振りで
子供に出來得る限りのことは
一つとしてせずには措かなかつた。

然し間もなくルカは十歳に達したから
山の嵐にも向ふことが出來、その高嶺まで
困苦を恐れず、疲勞の多い遠路を厭はずに
父と共に日毎出かけて行つたので、
二人はよい仲間であつた。
前にその羊飼の愛したものが、
今や一層愛すべきものとなつた。
若者を眺めてゐると、
太陽に光を與へ、風に音樂を與へる
種々の感情や靈感が迸り出て、

その老人が再び子供の若々しい心に
歸る思ひをしたことは今述べる必要もない。

かやうに朝夕父親の膝下で少年は育つた、
そして十八歳を迎へたとき、
彼は父の慰安であり、日々の希望であつた。

かやうに單純な家庭生活を毎日過してゐるうち
マイケルの耳に悲しい音信が聞えた。これより遙
か昔のこと
この羊飼は甥のために借金の保證人となつた、
彼は勤勉であり、資力も裕であつた。
然るに意外の不幸が突然彼に襲ひ來て、
老いたるマイケルは
今やその科料を支拂ふやうに命ぜられた。
悲しむべき科料、しかも
それは彼れの資産半ばに等しいのだ。
この思ひもよらぬ要求を
初めて聞いた彼は、暫くの間
老いの身としては堪へ得ぬと思はれる程の希望を
彼の生涯から奪ひ去られた。
その困難に面接してゆく丈の勇氣を以て
心を固めたものゝ、
羊飼ひの唯一の手段は祖先傳來の畑の一部を
すぐ賣り出さうと、いふことであつた。
これが最初の決心であつた。
再び考へ直すと勇氣は挫けた。
この音信を聞いて二日目のこと
『イザベル』と妻を呼んで彼は言つた、
『俺は七十年以上も働いて來た、

そして神の溫かい愛の光を豐かに受けて、
みんな暮して來た。それにもし畑が
人手に渡つてしまふと、墓場に入つても
安らかに眠れないやうな氣がする。
俺達の一生は辛い廻り合せだ。
お天道樣でも俺ほど精を出されなかつた。
生き永らへた俺は、他人を助けようとて反て
家族の仇となる愚か者になつた。
彼は惡者で、もし俺達を欺いたとしたら
遣り口が惡い。假令不實でなくとも
貧しい俺達には甚だしい損失になる。
いや彼を赦してやる——然し
こんな愚痴はこぼさぬがましだ。

お前とこの話を始めた時、損害の償ひ方と
景氣のよい前途の希望を語るのが、俺の目的だつ
た。
ルカを他所へ遣はさう、
イザベルよ、土地は手放すまい、
そして地所についた借金を絶ち、
あの野良を吹く風のやうに氣樂なものにして
あの子のものにしよう。お前も知る通り
俺には今一人の親類がある。こんな災難の時には
俺達を救けてくれるだらう。彼は商賣も繁昌する
一角の男だ。そこでリュウクを彼の許へ遣らう、
そしてあの男の助けとリュウクの儉約とで
すぐにこの損害も償へる、
するとリュウクも家へ歸つて來られる。
こゝにゐたとて何が出來るか？
誰もが貧しい所では

何を儲けられるものか？』
これを聞いて老人は默した。
イザベルも口を利かないでゐた、
彼は過ぎた日を樣々に思ひ浮べてゐた。
例へばリチャード・ベイトマンは
村の義金で養はれる孤兒であつたが——
教會の戸口で
人々は彼のために金を集め、
それで近所の人は籠を買ひ
行商人の品物を入れてやつた。
すると、この籠をもつて、この子は
ロンドンに行き、雇主を見つけた。
その主人は大勢の中からその子供を信用して
海外である商賣を監督するやうに選んだ。
そこでリチャードは驚くほど金持ちになつて
貧乏人のために地所と金とを殘した。
そして生れ故郷には外國から取寄せた
大理石で床を作つた教會堂を建てた。
これらの追憶や、
これと同じやうな種々の思ひ出は
イザベルの心に閃き、
彼女の顏は輝いた。老人はこれを見て喜び、
またしてもいふには、『どうだ、イザベルよ！
この目論見は、この二日間、俺には非常な悅びで
あつた。
損失よりも殘る方が遙かに大きい。
——今は澤山だ——たゞ願ふところは
今少しく若ければと思ふことだ——
然しこれは善い望み。

リュウクの晴衣を作れ、一番よい衣物を
多く買つてやれ、明日にも、明後日にも
いや今夜にも遣らうぢやないか。
――實際行けるものなら
今夜行くといゝのだが。』

こゝでマイケルは話を止めて、
心も輕く畑の方へ出て行つた。
妻はそれから五日間
朝から晩まで休みもなく働き、
終日、息子の旅に必要な物を
その指先で出來る限り巧みに作り續けた。
然し日曜日が來てイザベルはその仕事を
休むやうになつたのは嬉しかつた。
その譯は彼女がマイケルの傍に寢てゐた時、

二夜彼が夢魔に襲はれてゐるのを聞き、
翌朝二人が起き上つた時に、イザベルは
彼のこれまでの望はすべてなくなつたのを知つた
からである。
その日の正午、イザベルはリュウクと二人だけ
戸口で腰かけてゐた時、
彼女は言つた、『お前は行かないでおくれ、
お前は掛替へのない子、
お前以外に誰も心にない――行かないでおくれ、
お前が行くと、お父さんは死にさうだ。』
リュウクは樂しさうな聲で返事をした、
イザベルは心配を打ち明けると
勇氣を回復した。その夕べ彼女は
心づくしの馳走をして、家中の者は皆
クリスマスの爐を取卷き、

幸福な家族のやうに坐つた。

夜が明けると、イザベルは
またもや仕事を始めた。
その一週間は、家中が
春の森のやうに樂しく見えた。
終に待ちに待つた便りが親戚から來て
子供の將來に就いては
出來る丈のことをしようといふ
親切な保證をしてあつた。
そしてすぐ子供を寄越すやうにと
いひ添へてあつた。幾度も幾度も
その手紙は繰返し讀まれた。
イザベルはそれをもつて近所に見せて廻つた、
その當時英國中に

リュウクほど得意なものはなかつた。
イザベルが家に歸つて來ると、老人は
『明日出發させるんだ』と言つた。
これを聞いて妻は色々な事柄を述べ、
そんなに急に出發させると
たしかに疎濶なことになると答へたが、
最後に彼女も同意し、マイケルは安堵した。

グリン・ヘッド谷の水音高い溪流の近く
深い谷間に、マイケルは
羊飼ふ園を作る計畫をしてゐた。
あの悲しむべき損失の報知(しらせ)を聞く前、
その目的のために一山の石を高く集め、
いつでも仕事の始められるやうに
溪流のほとりに積み重ねてあつた。

その夕方リュウクをつれて
その方へと歩いて行つた。
間もなくそこへ來ると彼は立ち止まつて
息子に言つた、『リュウクよ、
お前は明日訣れねばならぬ。
お前を見てゐると俺の胸は一杯になる。
生れる前お前は俺にとつて望みの種であつたが
生れてこの方お前は俺の日日の喜びであつた。
これから二人の今日までの身の上話を
お前に話さう、その話はお前が傍にゐない時
お前にはよい藥になるだらう、
勿論お前にはまだ判りかねる事に話は及ぶが。
——お前が始めてこの世へ生れ出たとき——
生れたばかりの赤子にはよくあることだが——お
前は二日間

遠慮なく眠りつゞけ、それまでは歡び祝ふ聲も
お前の父の口から出なかつた。
一日また一日と過ぎ去つた。
お前に對する可愛さはいやましに募つた。
爐邊で、何の言葉も交へぬ、たわいもない自然の
調子で
初めてお前が聲を出したとき、
生きとし生ける者の耳に
それほど快い響きは聞えなかつた。
そのうち、乳を飲むやうになつたお前は
歡びの餘り母の胸で歌をうたつた。
月日は過ぎ行き、俺は野や山で暮し、或は
お前を俺の膝に載せて慈愛深く育てゝやつた。
でも、リュウクよ、お前と俺は遊び仲間であつた。
この丘では、お前もよく知る通り、吾々二人は

老人と子供の遊び仲間であつた、
俺のために
お前は子供の知る娯樂を何一缺がなかつた。』
リュウクは氣丈な心をもつてゐたが
これを聞いて聲高く啜り泣いた。
老人は彼の手をとつて
『どうした。そんなに心を動かしてはいけない—
こんなことはいふ必要はなかつたのだ。
——殆んど出來る限りまで俺は
親切なよい父親になつてゐたんだ。それでもつて
他の人々の手から受けた恩義を
俺は返したまでだ。俺はもう
人間の定命以上に年をとつてしまつたが、
幼い時に可愛がつてくれた兩親の事はまだ忘れな
いからの。

兩親は同じ墓に眠つてゐる、
先祖と同じやうに
この土地で暮したものだが
やがてあの世へ行く時が來て
彼等は喜んで先祖代々の墓所に眠つた。
お前も先祖が送つて來た生活をして貰ひたいが、
然しリュウクよ、振返つて見ると隨分永くて、
それにこの六十年間の生涯から得る所は極めて少
なかつた。
この畑が俺の手に入つた時は抵當に入つてゐた。
四十になつたときも
僅かに遺産の半ばが俺の所有だつた。
俺は一生懸命で働いた、
神樣は俺の仕事を助けて下さつて
この三週間前まではこの地面は俺のものだつた。

——この土地は他の地主に仕へるのは
堪へられぬといつたやうな樣子をしてゐる。
だから、リュウクよ、
俺の判斷が誤つてゐるかも知れぬが
お前が行つてくれた方が上策と思はれるよ。』

かういつて老人は默つてしまつた。
それから、近くの石を指しながら
暫くしてから再び口を開いた。
『これは吾々二人の仕事だつた、然しリュウクよ、
今となつては俺の仕事になつた、
だが一つの石を据ゑてくれ——
ここへそれを据ゑてくれ、お前自からの手で。
これ、リュウク、元氣を出してくれ。
二人は生き存へてゐる內には
幸福な時代を迎へることも出來よう。
八十四といふ年で
俺はまだ强くて矍鑠としてゐる。
お前の務めを盡せよ、
俺は俺の務を果すから。
お前に任せてあつた多くの仕事を
またこれから始めるのだ。
あの高嶺へ、暴風雨の中へも
俺はまた一人で行くのだ、そして
お前の顏をまだ見ぬ前から
自分獨りでやつてゐた仕事をすべてするのだ。
どうぞ達者でゐてくれ！
過ぐる一週間お前は種々の希望で
胸を躍らしてゐたらう。
さもあるべきことだ——

よし、よし——
お前は俺の側を離れるのを
決して歡んでゐないことはよく分つてゐる。
お前と俺は唯愛といふ鎖でつながれてゐる。
お前が行つてしまつたら
ほんとに寂しいことだ！——あゝ、さうだ、
こゝへお前を連れて來たことを忘れてゐた。
さつき賴んだ通り親石を据ゑてくれ、
これから後お前が遠くへ行つてから、もし惡者が
お前の仲間になることがあつたら、俺を思ひ出し、
今日のこの時を思ひ出してくれ。
お前の心がこゝへ歸れば
神樣はお前の心を强くして下さる。
あらゆる恐怖と誘惑の中にある時は、
先祖代々が送つて來た羊飼の生活を忘れぬやうに
してくれ。
彼等は純朴であつたので、
牧畜業のために立派な働きをなした。
さあ、機嫌よう行つてくれ、
お前が歸つて來た時には、この場所で、
今は影も見えぬ一つのものを作つておかう。
それを二人の間の約束としよう。
然しお前の運命がいかに變らうと、
俺は最後までお前を愛する、
そしてお前のことは草葉の蔭まで忘れずにゐる。』

羊飼はこゝで言葉を終り、リュウクは仰向いた。
父の賴んだ通り、
羊欄の親石を据ゑた。
これを見て老人の悲しみは一時にこみあげた。

彼は息子を抱いて接吻しながら泣いた。
そして家へと一緒に歸つた。
——夜になるまで、家は靜かであつた、
いや、眞の平和でなく
表面上の平和といつた方がよいかも知れぬ。
翌朝夜が明けると、息子は旅に出た、
そして國道へ出たとき、彼は剛毅な顏を裝つた。
近所の人々は彼が門口を通るとき
挨拶や別れの祈りをして
彼の姿の見えなくなるまで見送つた。

リュウクの好成績について
親戚からはよい音信が來た。
息子からも珍しい便りに充ちた
愛情の籠つた手紙が來た。

母親の言葉を借ると、始めから終まで
『世にも稀な見事な手紙』であつた。
兩親は胸躍らせながらそれを讀んだ。
かくて月日は過ぎ、羊飼はまたもや
安堵と愉快な思ひで
日々の仕事に從事した。
そして時折閑のときには
谷間の方へ行つて
羊の柵を作つた。
その内リュウクは務を怠り始め、
終に放埒な都會生活に感化されて
放蕩に身をもちくずすやうになつた。
汚名と恥辱を身に受け、はては止むなく
海の彼方へ身をかくさねばならなくなつた。

愛の力にはある慰安がある。
もし愛の力がなければ、分別力を失ひ、
勇氣を挫くことを見込のあるものとしてくれる。
この老人をよく知つてをり、また
この悲報を聞いてから後いかなる風であつたかを
よく記憶してゐる人と一度ならず話した。
彼の體格は若い時から老後まで
人並勝れて强壯であつた。
巖の間に行つては尙も太陽や雲を眺め、
風の音に耳を傾け、昔ながらに
羊の群や、僅かな遺産の土地の
世話などすべてしてゐた。
そしてあの洞の谷間へ、
時々出かけて行つたが

それは羊に必要な柵を作るためであつた。
當時この老人に對して誰でも懷いた憐愍の心は
今もなほ忘れられてゐない。
彼は幾度そこへ行つたか知れないが
一つの石も動かさなかつたといふことである。

その柵の傍で彼は時折
老ぼれてゐた忠實な犬を足許に寢かせて
たゞひとり坐つてゐることがあつた。
滿七年の永い年月の間
彼はその羊の柵の建設に努めたが、
未完成のまゝ終にこの世を去つた。
三年か、その位、イザベルは
良人より生きながらへた。彼女が死ぬると
地所は賣られて他人の手に渡つた。

「宵の明星」といはれた小舍は消え失せ、
——地面は耕されて畑となつた。
近隣はすつかり變つて來た。
たゞ榊のみが戸口に殘つてゐた。
そして泡を嚙んで流れる
グリン・ヘッド谷の溪流のほとりには
未の完成まゝの羊の柵の石が
今も空しくそこに殘つてゐる。

——一八〇〇——

解　説

抒情短詩

虹

グラアスミアのタウン・エンドの果樹園で書いたもの。眞に價値ある個性は深く不斷に自然を感得することを求めてゐるといふ信仰を認めて書いた抒情詩で、彼のすべての詩の基調をなし、『序曲』を抒情詩に簡約したもので、『永生の頌』も畢竟するにこの詩を敷衍したものたることは、彼が該篇の冒頭にこの短詩を引用したことによつても十分證明せられる。この崇高なる短詩をエマスンが評して、「十九世紀に於ける英國思想の高調標」なりといつたのも決して過言ではない。ワアヅワス自らがその詩集の冒頭にこの詩を置いたのも、その詩が彼の知的生活の連續は勿論その著しい一樣さを示してゐるからである。

虹はそれ自身自然界の現象の中で最も美しいものの一つであるのみでなく、宗教的聯想（創世紀第九章――十七節）のために詩人にとつてはその幼時に心を躍らせたのである。幼兒は自然に接して驚異の情を感ずる。その情は實に至純で高潔である。けれども生長するに連れて俗氣に觸れ、浮世の錆に腐蝕され、不思議な造化の美妙さに對する感覺は鈍つてしまひ勝ちで、洵に悲しむべきことといはねばならぬ。それ故に吾々は天眞爛漫な心を持續して、自然の美に觸れ、造化の神祕に驚き、一生を性來の至純な心で暮して行きたいといふ意である。

子供は人の父。　子供は自然の眞面目を多分に有ち、幼時の純な心から成人の思想感情が生み出される故に子供は大人から見ると、其源であり、父であるといふ逆說。ワアヅワスの詩句の內で最も人口に膾炙した有名な一句。

コウルリッヂのいふ所によると、初めこの詩は『厭ふべき幼稚さ』の一例として嘲笑せられたといふことである。然しコウルリッヂは「然し死者をして彼等の死者を埋めしめよ！　詩人は生者のために歌つたのだ」といつてゐる。（『ザ・フレンド』第一章を參照せよ。）彼はまた『文學的生涯』（第四章）で次ぎのやうにいつてゐる――

「幼時の感情を大人の力にまで續けてゆくこと、子供の驚異と新規の感覺と恐らく四十年の間每日親密になさしめた狀態とを結びつけること――これこそ天才の性格であり特權である。」

幼心。原文の natural piety で宗教等に基く信仰でなくて、人間が自然に具へてゐる敬虔の念。虹を仰ぎ見ても自然の不思議と宇宙の神祕に跪くやうな想ひ。

妹　に

わが子に連れられてアルフォックスデンの家を少し行つた所で作つた詩だ。そこにある公園と池を蔽うてゐる二本の大きなエルムの樹の間で、詩人は讀書したり詩作することを常としたといふ。この地方の風景はワアヅワスにとつては盡きぬ喜の泉であつて、この詩はドラシイを呼びかけて美しい戶外への召喚である。『忠告と返答』及び『局面一變』と同じ樣に、自然に對する『賢明な忍從』を歌つたもの。

エドワアド。少年給仕で、バジル・マンタグの息子。

黃水仙

タウン・エンドに於ける作。最初一八〇七年に"Moods of my own Mind"といふ叢書の中に收められて出版された。詩中の光景は一八〇二年四月十五日アルズウォタア湖畔のゴオバラウ・パークで見た事實に基いたものである。ドラシイの日記に、「ゴオバラウ・パークの向うの林へ行つた時、水際に少しの水仙を見た……然し進むにつれて水仙は次第次第にその數を增し、終には樹木の梢の下に、岸邊に沿うて蜿蜒として帶の樣に連り、其幅は殆ど田舍の大道の廣さであつた。私はかばかり美しい水仙を見たことがなかつた。その花は苔蒸した石の間に生え、或は石の周圍に、或はその上に、疲れては枕に臥すやうに、その頭を岩石の上に橫たへ、其他のものは搖ぎよろめき踊りなどして、正面の湖上を吹き渡す風に笑ひ興ずるやうに見えた。その花は絕えず煌めき、絕えず變化して非常に愉快さうであつた」と。水仙は今も尙そこに澤山咲いてゐる。

この詩より巧みな抒情詩は他にないと迄賞讃せられた名詩である。詩人は完全に題材の精神を捉へ、自然美の純粹な喜悅を描いてゐる。詩の起原は靜謐に於いて回想した情緖にあるとの彼の詩論を最も眞實に例證してゐる。最後の二行は夫人の作つたものである。この詩は『雲の如くひとりさまよひぬ』"I wandered lonely as a cloud"と

ふ題になつてゐることもあるが、内容よりいつてバルレイヴと同じ様に『黄水仙』とした。

雲雀に(一)

ワアヅワスの詩の中で、これは最も眞に迫るやうに思れる。それは雲雀の歌そのものゝやうに自湧的な詩である。自然の生命が歡喜の一つであり、神に對する愛と夫の一つである考へは、詩人が自然と常に歩んだ宗教的畏怖の精神を特色づけてゐる。かうした詩の美しさは深い詩的狂歡、すべての教訓的性質を全く離れて、しかも高い道德的目的をもつてゐる點にある。天を翼け昇る雲雀に倣はうと願ふ所にもロマンティシストの心持が明白に現はれてゐる。同じ題目のシェリイの詩及びメリディスの『昇る雲雀』を參照せられたし。

雲雀に(二)

ライダル山での作。この詩は元來三つのスタンザになつてゐる(アアノルドの選集は、元の儘にしてある)が、その第二のスタンザは一八四五年に、『朝の散歩』(Morning Exercise) といふ詩の中に置き換へられてあるので、玆には普通の編纂者のやうに第二節は省略した。

早春の歌

詩人の語る所によれば、この詩は「アルフォッドの村にあるコウムから、アルフォックスデンの地所を流れてゐる小川に坐つてゐた時、實際に作つたものである」と。アルフォックスデンの谷にある柊の森は、ワアヅワスやコウルリッヂや、その他の人々の會合所となつてゐたので、コウルリッヂも『私の牢獄であるこのライムの木』(This Lime tree Bower my prison) の詩でこの場所を歌つてゐる。

この詩は早春の森の中に身を横たへて、自然物に溢れてゐる歡喜と、萬物の間に宿つてゐる或調和の力を感じたことを歌つたもので、『妹に』の詩に共に、彼が自然に對する初期の態度をよく示してゐるものである。彼が示さうとする二つの主要な觀念は、自然の喜悅と、人類の苦痛を癒す自然の力である。ジョン・モオリイはいふ、「ワアヅワスの要求、彼の特別の天賦、彼の永續する貢獻は、異常な奮鬪、眞率、洞察にあつて、是等によつて彼は先づ吾々を圍繞する廣大な宇宙を理想化し、莊嚴化し、次いで、それをば、人間がその義務を果す劇場は勿論のこと、吾々の行爲と交り、吾々の周圍に親しむべき魂を濺ぎ、『人間生活の最も卑しい面にも莊嚴を呼吸する』ところの生氣ある存在とする」と。自然に關するこの感情はシェリイの汎神論と比較せられる。二つの感情に於ける類似と相異は、二人の詩人の間に於ける類似と相異の定規である。他方、ワアヅワスは人間の運命の半ばから眼を他に反け(アアノルド)、あらゆる生氣ある事物の運命の半ばから眼を轉ずる。『齒が赤く、强奪の爪』であるといふ自然は、ワアヅワスには新しい概念であるが近代の哲學者は無視することに出來ぬものである(ファウラア)。テニスンの『イン・メモリアム』(五五章——五六章)を比較せよ。

ワアヅワスがハドスン博士から賞讃を受けたのもこの小さな詩によるものである。

胡蝶に(一)

「一七七八年に母が死んで、まだ幼かつた吾々は別居することゝなつた」と序にあるのを見ると、母の生前、一家打ち揃つて家にゐた頃に、妹と共に蝶を追うたことを想起して作つたものであらう。ドラシイの日記に、「吾々が朝餉をしてゐる時、ウィリアムは蝶に與へる詩を書いた。蝶を見て常に感じた愉快さに就いて吾々が語つてゐる時に詩想が彼に起つたのである。私は蝶々を少しは追ふのが常であつたが、翼から粉を拂ひ落すことを怖れて蝶を捕らなかつた」と。

エミリイン。ドラシイの假名。時にエムマともしてある。

胡蝶に(二)

三十三歳にして詩人は尙かくの如き純眞なる心をもつてゐる。

三月

卽興詩で、ジョアナ・ベイリイが好いた詩である。ドラシイの日記にはこの詩の出來た時のことを美しく書いてある。それはバタデイルからカアクストンの路を越えて

アムブルサイドに行く散歩の時であつた。

「吾々がブラザア湖の下方に來た時、橋に腰かけてゐるウィリアムを後にして、森を通つて湖水の右側の道を歩いて行つた。歸つて見ると彼は詩を書いてゐた――ウィリアムは吾々がカアクストンの麓に歸らぬ内にその詩を書きあげた。」

ワアヅワスは思想と交らぬ單純な喜びを歌ふことは極めて少ない。この詩などはその例外で、快い朝の目と耳に於ける殆ど自生的な肉體的の喜悅の溢れである。一幅の繪卷物を擴げたやうなこの詩の中には、人と獸と自然とが相融合してゐる有樣が巧みに描かれて、作者一流の光明觀が窺はれる。

3 郭公に

シェリイの『雲雀』、キイツの『夜鶯』と共に有名な詩である。恐らくワアヅワスの短詩中でも最も人口に膾炙する美しい抒情詩で日本にも古くから紹介せられ、ワアヅワス入門の詩である。グラアスミアの果樹園で書いた詩で、日附は一八〇四年となつてゐるが、ドラシイの日記によると一八〇二年三月である。郭公は詩人の最も愛した鳥で、その啼き聲を好んだ。彼の詩の中で『郭公』はワアヅワスの愛兒である。この詩は彼の最も善い性質の一つの特徴、日常の事物に就いて本質的な魂を捉へて表現する能力を示してゐる。それは單純で眞率な詩想に充ちてゐる。彼はこの詩の他に郭公のソネット（一八二七年及び、一八二七年）に、伊太利のラヴェルナでも作つた。

二つの四月の朝

この詩のマシュウは、『泉』のそれと共に作者が知つてゐた實際の人物ではなくて、彼の組の數人及び其の他の人々をモデルとして作りあげた架空的人物であるといふ。

この詩は作者の詩的主題の持論をよく例證してゐる。そこには單純で眞面目な或物がある。それは劇的興味を缺き、人或は平凡だと評する人もあるかもしれぬが、正しい想像と情緒を傳へてゐるので、事件はそれを散文以上に引きあげる魅力と哀愁を以て輝いてゐる。

4 奇しき戀

以下五篇の詩は所謂『ルウシイの詩』（『ルウシイ・グレイ』は別のもの）に屬するもので、獨逸ゴスラアに滯在中一七九九年の始めに作つた絶妙な抒情詩――金絲に繫がれた眞珠である。作者は無題のまゝにして置いたのを後の編纂者が之れを多く『ルウシイ』と題を附した。このルウシイが如何なる女であつたかは、あの說明好きの詩人も全然口言してゐないので、全く謎の儘になつてゐる。一般にはドラシイがモデルであるといはれてゐるが數年前一書を著してワアヅワスの戀愛事件を發見したハアバア教授は、詩中の處女はフランスの婦人マリ・アンであるといつた。然しロバト・リンドの如きはこの說を必ずしも妥當なものとは認めてゐない。恐らく彼が書生時代の戀愛事件に基いてゐるもので、友もなく、金も少く親へ例になく寒いゴスラアの旅舍にあつて、懷鄕の念の禁じ難い所へ、アンネットとの戀に深かく惱んでゐた反動として、美しい初戀を思ひ出したものではなからうか。何れにしてもこの詩が戀愛詩であることは明確である。然も普通の性愛的な戀歌でなくて、全く純粹な戀愛詩でこの乙女は自然の清純と優しい愚寵の權化のやうに思はれる。ラム、オリファント、ウィンチェスタア、ハアン等が讃美してやまなかつたこの美しい單純な詩、涙なくして讀まれない沈痛なこの戀歌は、ワアヅワス詩集中の珠玉である。

人も通はぬ山里の

珠玉の如き抒情詩で、一八〇〇年に公にされた。乙女の優しさと無邪氣が十分現はれ、詩人のスタイルの單純さが題目と全く調和してゐる。殊に最後の齣が最も意味深長である。

ワアヅワスの詩は詩句が單純で且つ微韻幽趣に充ちてゐる故に、譯出し難い。殊にこのルウシイの詩の如きはその好例である。ディクスンも最後の齣を擧げて、「この詩句の匂ひは外國人には失はれて譯出し難い」とまで極言してゐる。

ダヴ、詩人や魚釣家に愛せられたこのダヴ河は、ダアビイシアを流れる同名の川でなくて、湖水地方にあるカ

アクストンの附近の小川であると、サマヴェルはいつてゐる。

知るべもあらぬ旅の空

詩人はケムブリッヂ在學中に一七九〇年の夏休暇を利用して瑞西を翌年は佛蘭西を旅行した。この佛蘭西旅行中マリ・アンとの戀愛事件が起つた。これら過去の日の過失を悔いつゝ、今ゴスラアの旅舍で英國を望む時、愛國の情は油然として起るのであつた。わが戀ひするルウシイは故國を離れず、英國の山里に住み、故國の野邊を眺めてこの世を去つた。その間に自分は異境の旅に在つて悪夢のやうな年月を送つた。さあこれからルウシイの住んだ故國を離れまいといふのがこの詩の大意である。最後の二行には深い悲痛の感じが一層よく現はれてゐる。

自然の貴女

バルグレイヴは『自然の教育』(The Education of Nature)といふ題を與へてゐるが、こゝでは編纂者の普通採る題によつた。

ワアヅワスの如く、自然の感覺性を鋭敏に感じた詩人は少い。(『早春の歌』參照)この詩に於いて、彼の擬人法は一層露骨になつてゐる。風の如く水の如く自由で輕快で、花の如く星の如く華麗で精美な自然の愛兒を巧みに描き、田舍乙女の精粹を歌ひ得て餘りある詩である。ラスキンの『胡麻と百合』を參照。

愛の睡みに魂を包まれて

美しいルウシイに對する愛によつて、彼女が死すべき人間であることも忘れて、浮世の苦惱を超越して樂しい夢を見て眠つてゐたが、それは束の間の夢で、彼女は死んで土に歸り、岩石樹根と共に地球を組織する一分子となり、個的生命が失はれて宇宙生命に歸したことを歌つた悲歌。テニスンの『イン・メモリアム』等に見るやうな汎神觀が現はれてゐる。

雀の巣

註に、「グラアスミアのタウン・エンドの果樹園で作つた。コッカアマスにある父の家の庭の端は、ダウエント川やコッカアマス城を眺められる高臺になつて、これは我我の氣に入りの遊び場所であつた。高臺の石垣は低くてきちんと剪つた玉椿や薔薇で蔽はれてゐて、そこに巣を作つた鳥には殆ど出入の出來ない程の隱れ家となつた。この詩の後半はそれらの巣の一つに關したものである」と。詩人は雀の巣を發見して、幼時を回想し、妹が自分に與へた感化の偉大であつたことを回想した詩である。「妹は眼を與へ、耳を與へた」といふ一句は詩人が愛妹の美德を讃美した言葉として有名になつてゐる。

彼女は歡びの幻であつた

グラアスミアのタウン・エンドで書いた時。詩人の語る所によると、この詩は初め『ハイランドの乙女』の詩の一部分として書いた四行を後になつて全く別の一篇としたものである。「かやうな有樣で始まつたものではあるがその明白に示してゐる通り、私の心情から書いたものである」と詩人はいつてゐるが、この詩は一八〇二年に彼と結婚したメリイ・ハッチンスンを讃へたもので、同樣な例證は『序曲』(五章二二四行、十二章一五一行、十四章二六八―二七一)にもある。

女性の美を稱へたこの詩は單に特別の一女性の美のみでなく、あらゆる女性の本質の特徴を歌つてあつて、ラスキンもその「巧妙な正しさ」を稱讃してゐる。

綠の紅雀

『鳩の家』で書いたもので、こゝでは紅雀を屢々見ることが出來たといふ。「果樹園の腰掛」は庭の後の高臺にあつて、そこへは詩人自から作つた石段がつけてあつた。詩人的自然科學者の立場から紅雀が心にくいまで詳しく描かれてゐる。詩人の他の鳥の歌と異る所は、反省のない喜びの單なる表現である點である。この美妙な詩はすべての點に於てミルトンの「單純、感覺的、情熱的」といふ規矩に一致してゐる。

巖の櫻草

詩人の註に、「ライダル山にて作る。ライダルからグラアスミアに到る中間路を少し行つた右側にこの巖が立つてゐる。この詩にも記してある通りこの巖に螢が多く停

つてゐるのを時々見たので、吾々はこれを螢岩といひならはしてゐた」と。

ドラシイの日記に、「吾々は夕方ライダルへ歩いて行つた。コウルリッヂと私は後から道草食つてゆる〳〵歩いた。吾々はみんな立つて螢岩を眺めた――そこには櫻草が生えてゐた」と。

巖だけは今も尙湖水地方の記念物として殘つてゐる。『黃水仙』の輕快な魅力と自然の魔力と、緩漫な、より美しく、遠慮勝なこの詩との間に對照のあることを認められる。この詩ではすべてが象徴で、實在は殆どない。最初はためらひ勝ちの好みで花が描かれてゐる。それから作者は花の生命が暗示する一層大きな眞理を眞面目に考へる。最初の四句は作者の初期の詩――『雛菊』や『白屈采』等――に似てゐるが、後半の歌は純粹に主觀的な反省であつて、この花の本質的な意義でないと思はれる。オオブリはこの詩を以て作者の崇拜者には明かな靈感を與へるものであるといつてゐる。

泉

マシュウを歌つた詩が四篇あるが、本篇はその一つで、泉の傍に坐つてゐる老人と青年詩人との對話を書いたもので含蓄多い詩である、快活な老人の中にも寂しい悲しさが低調子をなしてゐる。

忠告と返答

次ぎの『局面一變』と共に、ワアヅワスの思想の精髓で、「自然はすべての教師の内で最良の又最も眞實なものである」といふ彼の有名な持論を最も直截簡明に言ひ現したもので『抒情詩集』に收めて公にし、『ティンタン寺』と相並ぶ雄篇である。而して彼が後に至つても全然改竄を加へなかつた詩の一つに入つてゐる。この問答詩の相手になつてゐるマシュウは、他の詩『局面一變』、『マシュウ』、『二つの四月の朝』、『泉』等にも現はれる人物で、大體は彼の幼年時代にホォクスヘッドの學校の教師であつたウィリアム・テイラアをモデルにしたものであると想像されてゐる。

この詩は、マシュウが詩人の怠惰を責めた言葉と、之に對する詩人の返答であつて、自然は自から我々に感化を與へるから、受身になつてをれば、眞理は自から顯現するといふ彼の思想の特色を說いたものである。

エススウェイト、ホオクスヘッド學校の南にある小さな湖。

局面一變

前篇とは反對に詩人がマシュウを責め、事物に對する態度を一變して、書物を捨てゝ自然に教へを請へと說いたものである。彼が自然の美から受ける感化は、書物を繙くよりも勝つてゐることを力說した結果、誤解を招き易いが、ワアヅワス自身は、自然界と交感する時は、書物が教へる以上の道德的力と洞察力を心情から喚び起し、これによつて、單なる知識が與へるよりも、善惡に就いて一層明かな觀察力を得らるゝことを唱道してゐるものである。

小さな白屈菜に

野邊の小草の花にも人間性を賦してこれに愛情を寄せた詩の一つ。『くさのわう』は早春に星形の黃色花を晴天に開き、曇天または黃昏に閉づるといふ非常に美しい花であるが、英國詩人の未だこれを歌つたものがなかつた。この小花を愛したワアヅワスは始めてこの詩及び他に二篇(一八〇三年及び一八〇四年)を作つた。この詩はグラアスミアの鳩の家で作つたもので、一八〇七年に至つて始めてこれを世に公にした。一八〇二年四月三十日のドラシイの日記には、「我々は朝餉後直ぐに果樹園に來て坐つた。湖水は靜かで、空は曇つてゐた。ウィリアムは『くさのわう』の詩を書き始めた……私はウィリアムとあちらこちらと歩いた。彼は私に詩を歌つて聞かせて、それから又書き始めて、棄てなかつた」と。

ブラヴァントの "Fringed Gentian" エマスンの "Phodora" テニスンの "Flower in the Crannied Wall" を參照。

胡蝶を追ふ知更鳥に

タウン・エンドの果樹園での作。一八〇二年四月十八日(日曜日)のドラシイの日記に「水蒸氣の立つ穩やかな灰色の朝、吾々は果樹園に坐つた。ウィリアムは駒鳥と蝶に

就いて詩を書いた……ライダルで逢つた時には駒鳥の死を書き終つてゐた。私はこれを寢床で讀んで聞かせた。我々で數行省略した」と。

知更鳥を讃めた歌には其他に三つ主なるものがある。父なるアダム。「失樂園第十一卷を見よ。そこでは最も快活な羽毛をもつた二羽の鳥を追ふ鷹の不吉な前兆をアダムがイヴに指し示めしてをる。そして優しい牝鹿と牝鹿は、彼等の敵に追はれた。」(ワアヅワス)

雛菊に(一)

本詩にある通りチョオサアを始めワアヅワス以前の詩人も雛菊を歌つたが、近代の詩人の中で最も雛菊を愛した者はワアヅワスである。彼はグラアスミア湖畔で一八〇二年に雛菊に關した三篇の詩を作つた。これらの詩に於て彼が特殊の意味で自然の詩人であることを示してゐる。ダウデンのいふやうに、彼にとつては花は日常の靈的生命と存在の喜悅の生きた共享者である。この詩はモントゴマリ Montgomery. (一七七一—一八五四)の『野花』(A Field Flower)に似てゐる所があると評者はいつてゐる。次ぎの『雛菊』と共に作者が『想像の詩』として分類したもの。

雛菊に(二)

前の詩と形は全く同じで、且つ想像を主とした着想に於て大同小異である。この詩が三篇中の白眉と看做されてゐることは、バルグレイヴにこの一篇が載せてあることによつても明白である。又ラスキンも『近代畫家論』(第二卷)の中でその想像の奇拔でしかも自然なことを賞讃してゐる。

雛菊に(三)

詩形に於ては前二篇と同じであるが、內容に於ては別趣のもので、『情操と反省の詩』の中に作者は入れてゐる。短いけれど、教訓を含む點に於いて貴い詩である。

小猫と落葉

アアノルドの選集にはないが、ハアンが推賞してゐる詩である(『文學の解說』(八〇——八三一を參照)。愛すべき可憐な詩である。

木の實拾ひ

獨逸のゴスラアに滯在中一七九九年の冬に作つたもの。初めは『序曲』の一節として作つたのであるが、必要でないと思つて獨立の詩としたのである。彼は少年時代に榛の實拾ひに夢中になつて、エススウェイトの谷の森の中を荒し廻つた。この思ひ出がこの詩となつたものである。古い襤褸着物を見て頭陀袋と鈎を以て、よく知つてゐる榛の林へ少年は出かけた。そして木を力任せにへし折つて實をとつて喜んでゐる時、突然苦しい思ひが湧いて來た。彼は周圍にある自然の生命を汚し『默した木』と『木の間から覗く空』との叱咤を感じたのである。自然が靈的存在であるとの彼の思想は幼時の經驗から養はれたもので、この詩は彼のこの自然觀の出發點であり心理的崩芽とも見らるべき詩である。

○ひとり麥刈る乙女

一八〇三年の秋ワアヅワスは妹及びコウルリッヂと共にスコットランドに遊んで、『蘇國漫遊記念詩』數篇を物した。この詩はその一つである。九月十三日のドラシイの日記に、「我々が登り行くにつれて、景色は益々美しくなつた……時は收穫期で、野は靜かであつた——物思はしといはうか?——幾人かの刈女達に元氣づけられて。ハイランドの更に靜かな所では、唯一人刈つてゐることは普通である」と。作者自から註する所によれば、詩人が旅行中の經驗から、他人の紀行を想起して作つたものである。それは一友人トマス・ウィルキンスンの『蘇國紀行』の原稿を見て、その美しい景色に暗示せられ、此書中の語を其儘末句に轉用したといふ。ウィルキンスンのこの書は一八八七年に蘇國を旅行したので、ワアヅワスに紀行文を原稿のまゝ見せたものである。その末句には「唯一人刈つてゐた女の傍を通つた。彼女は鎌に身を屈めて、方言で歌つてゐた。今迄聞いたことのない美しい聲で、その調べは優美な陰鬱さを帶び、その歌が聞えなくなつた後も長く、快く感じた」と。

この詩は最も愛誦せられる小曲の一つで、言葉が如何にも優しく、音調が非常に好くて、言葉の魔力をもつゐ

る詩として、これ以上の詩はワアヅワスにないといつてよい。それは詩人の清明な想像力によつて創造された半ば神祕に富んだ光輝に有效に彩られた素朴な詩である。刈乙女の有樣を心に感ずるやうに歌つてある。兎も角彼の詩の中で最も完全なものゝ一つである。

（ブリディーズ。蘇國の北西にある五百に餘る風光美しい島々。杜鵑（カッコー）は候鳥で、四五月の候に歐洲へ來る。

バアンズの墓場にて

一八〇三年八月十六日、ワアヅワスはコウルリッヂ及び妹と三人でスコットランドの旅に上つた。然しコウルリッヂは途中で別れてエディンバラへ歸つたので、バアンズの墓を訪れた時は一緒にゐなかつた。二人は十七日の夕方ダムフリイスに着いた。十八日（火曜日）の日記にドラシイはかう書いてゐる――「バアンズの葬られてゐる墓場に行つた。……彼は墓場の隅つこに葬られてゐた。そして息子のフランシス・ウオラスもその側に眠つてゐた。……我々は悲しく痛ましい思ひ出を以てこの墓を眺め、彼の詩句を互ひに繰返して歌つた。」

"Is there a man whose judgement clear
Can others teach the course to steer,
Yet runs himself life's mod career
Wild as the wave?——
Here let him pause and through a tear
Survey this grave."
(A Bard's Epitaph)

バアンスは農民詩人として、純眞の詩情を歌に詠じ、一度はエディンバラの華やかな交際場裡に一代の寵兒として持囃されたが、晩年は悲慘な極みで、僅に三十六歳で死んだ薄倖の天才であつた。ワアヅワスが彼の墓場を訪れた時は墓石もなかつた位である。この一篇の詩は、バアンズが好んで用ゐた特殊の詩形に倣つて作つたものである。ワアヅワスは尙バアンズが晩年三年間住んだ小屋にも訪れた。これらの訪問は三篇の記念の詩なつてゐて、本篇もその一つである。

クリフェル。バアンズの住んでゐたダムフリイスの少し南にある山で、カムバランドのワアヅワスの住居に近いスキドオ山から見える。

○ハイランドの乙女に

バアンズの墓を訪れる少し前、丁度コウルリッヂが訣れてエディンバラへ歸つた日、即ち八月二十八日のこと、一行三人は雨中をカトリン湖を去つてロオモンド湖の方へ降りる途中の小路で、二人の田舍娘に逢つた。姉娘は拔出て美しかつた。彼等は足迄垂れるやうな格子縞の上衣を着て、顏丈は露してゐる姿が彼等一行の注目する所となつた。「彼等は快く答へてくれたので、吾々は全く嬉しかつた。同時に彼等も無邪氣さうに不思議な眼付で私共を瞶めた。」と、ドラシイが書いてゐる。この美しい娘は三人に非常な感銘を與へ、コウルリッヂも "a divine creature" と呼んでゐるし、ワアヅワスにとつても "delightful creature" であつて、この娘は女性の美の典型となり、屢この娘のことを歌つてゐる（『彼女は歡びの幻であつた』を參照）。彼は七十三歳の終りが近づいた時に、尙この乙女とその周圍の美しい光景をありゝと思ひ浮べたといつてゐる。

西方へ歩む

スコットランドの旅行中、九月十一日の日曜日の夕べ、詩人は妹と共に寂しい地方の最も寂しい場所を歩いてゐた時の詩。ドラシイはいふ、「あの遠く離れた所で、沈んだ夕日の夕映を止めてる前方の西方の空と共に、この單純な表情が如何に愛情に充ちてゐたか私には筆紙に叙べることが出來ぬ。ウィリアムは彼の感情及び私自身の感情を回想して、その後この詩を書いた」と。何となく情趣の深い詩である。因にスコットランドでは東西南北の方位を頻繁に用ゐる。どの家でも東の部屋と西の部屋があつて、食卓に就く時は誰の北に坐るとか、南に坐るとかいふ習慣がある。

訪れぬヤロオ

ハイランドからの歸途、彼等はエディンバラで一日を過し、次いでロスリンに行つた。九月十七日の朝彼等はラズウェイトに行つて、そこに住んでゐたウォタア・スコットに始めて逢つた。それからワアヅワスと妹はトキードの

谷を下り、ネイドバスを過ぎてクロヽヴェンフォードに行つた。こゝから彼等は英蘇國境史上に有名になつて、譚歌文學によく歌はれてゐるヤロオ河を訪れようとしたが、將來の樂しみにといふので、割愛することゝなつた。ヤロオは聖メリイ湖から流れてトキードに注ぎ入る小さな美しい河である。十一年後(一八一四年)に詩人は再びこの河を訪れて『ヤロオを訪れて』の詩が出來、更に十七年後(一八三一年)には、再びこの河を訪れて『ヤロオを再び訪れて』(Yarrow Revisited) を書いた。然しこの興味ある詩は他に二つより劣つてゐる。シャアプ教授は『三つのヤロオ』("Aspects of poetry" の一項)の題目の下に、それらの詩に就て面白い批評を下してゐる。この詩はヤロオの古いバラットの韻律で書きながらも、巧みに新しい自然觀を織込み、輕快なリズムの下に沈痛な思想の底流を潛ませた所にその特色がある。作者の初期の詩作と晩年のそれとを對照するのも面白いことであらう。ロオガンの美しい詩 "The Braes of Yarrow" と比較せよ。

ヤロオを訪れて

一八一四年の九月、詩人は妻及び妻の妹サラ・ハッチンスンと共に再びスコットランドの旅に上り　エトリックの羊飼ヂェイムズ・ホッグの案内で、多年の宿望であつたヤロオを訪れた。美しい自然を微妙に描いたものとしてこの詩は賞讃せられてゐる。信頼すべきシャアプの批評を左に引用しよう。

「英語の如何なる言葉も、之れ以上眞實に深刻に、自然の核心を貫いたものはない。あの廣大な光景の全體の感じを單純强烈な數語に集注して、其の眞髓に透徹し得るのは、ワアヅワスの偉大な才能の一つであつた。幾度か、そして幾多の異つた光景に對して、之れを試みたが、この力を十分に發揮したのは、ヤロオの眞性質を永久に概括した四行の外には、恐らくないであらう。諸君はヤロオを眺めて、此の四行を自分に繰り返して見る時は、自然の一層美妙にして捕捉し難い精粹が、これ以上完全に人間の言葉に由つて[illegible]表はされた事がなかつた事を感ずる。それは完璧[illegible]である。ワアヅワス以後の詩人はそれを再び試み[illegible]はない。それは一擧にして永久に完成されてゐる。」

詩人の碑銘

この詩は『ルウシイ・グレイ』、『木の實拾ひ』等と共に、一七九八年の冬から翌九年にかけて、詩人が妹と共に獨逸のゴスラアに滯在してゐる時に作つたものである。詩人の註に、「私は城壘や、池を埋め立てた公園のやうな所を毎日歩いた。こゝでは私はいつもちらりと見る魚狗(かはせみ)の他には友達はなかつた。從つて私はその鳥に心を惹きつけられた。かうした漫歩の間に出來たものがこの『詩人の碑銘』である」と。

この詩のモーティフはワアヅワスの詩によく現れてゐるもので、眞の知識はすべて愛に基づくものであるといふソクラテス等の思想である。

作者の理想的詩人として詩中に描かれてゐる人物は、ワアヅワス自分が有してゐる特性を有つてゐることが讀者には明かに分かる。

さうだ、それは山彦

詩人の註に、「グラアスミアでの作。ライダル湖の向岸を歩いてゐた時にナブ・スカアから木靈が聞えた。愛妹のために玆に述べたいことがある。ロクリグ山のこちら側の高い所で、彼女が或日一人で坐つてゐると、少し離れた岩の上から聞えた郭公の聲に感じて、その岩の間の石に自分の名を刻みたいとの思ひを抑へることが出來なかつた。散歩から歸つて私はこの詩を妻に讀んで聞かせた。」

この小曲は神聖な實在と感覺の世界以外に聖の世界を感得し、その聲を聞き得た詩人の心理を、簡潔にしかも印象强く言ひ現してゐる。『郭公』は呼子鳥の聲そのものを靈化した點で面白味があるが、この詩はその靈的の反響から更に一歩を進めて高遠な世界に思を馳せた點に於て、單純ではあるが想像力の豐かな一層瞑想的幽幻的な感じを與へる。

日は落ちてやゝなりぬ

詩人の註に「この卽興詩は、以前に著者の詩集中に入れられてあつたが、その後現はれた版(一八一五—一八三二年)には除外されたものである。友の要求で再び入

れられたもので、その面前で數行を省略した」と。詩人のいふ友とはドラシイのことである。

靜かなる夕べ

『夕べの卽興詩』と題したものの一つ。

農夫なる友人の鋤に

詩人の註に、「この人の名をトマス・ウィルキンスンといふ。クェイカア派に屬するが、天性により――寧ろ神の惠により――それ以上である。彼はエモント川の畔ヤンワスに近い處に遺產として一小地を受け、そこに一家を建てた。幼時は鼓笛の音に心を躍らしたが、今や彼の企業心は地を耕すことに限られてゐる。……この詩に記される通り、彼は餘暇を以て愛するエモント川の畔に、步道を作り、又庵とも別莊ともつかぬ物を建てた。彼は詩を多く作つたが、名作も少くない。」

この詩はワアヅワスがウィルキンスンの用ゐた鋤を畠で使ひながら作つた詩で、自然と人間とを結ぶ農業を讃美した一篇の農民詩である。

待雪草に

原名スノウ・ドロップは南歐及びコオカサス地方の野草である。英國では庭園の花として賞翫せられてゐる。和名は『雪の花』又は『待雪草』で日本にも傳播せられてゐる。この花は年の始めに咲くので、櫻草と共に春の魁、年の初花として珍重せられ、殊にその花が純白である所から、我國の白梅と同じやうな感興を以て賞翫せられてゐる。

待雪草を歌つた英詩は少くないが、テニスンの十行の短詩はヴン・ダイクの賞讃したものである。

ある少年

一七九八年獨逸での作。最初一八〇〇年の『抒情詩集』第二版に現はれた。この詩は『序曲』（五篇、三六四―三九七）の中にも入れられてゐる。

この所謂『不朽の少年』の墓場は確證することは出來ない。彼の名及び、玆に記述してあることを除いてもすべて彼の事は不明である。然し、彼はホオクスヘッドに於けるワアヅワスの學友であつたといふ。

幸福な武士

英雄的な戰士の性格に現はれてゐる道義の念を描いた有名な詩である。この理想の戰士の性格はネルソンをモデルにしたものである。ネルソンが勝利を得ると死んだ（一八〇五年十月二十一日）ことは、全英國民の心を動かした。ワアヅワスは彼れに暗示せられて一八〇六年の初めに作つたものであるが、ネルソンの公生涯にはハミルトン夫人との關係があつたため、ネルソンをそのまゝ理想的人物の典型とすることは出來なかつた。そこで彼は弟のジョンを以て性格の多くの要求を現したのである。ジョンは東印度商會の船長であつて、詩人兄弟は非常に深い同情が通つてゐたが、一八〇五年彼は難船して雄々しい最後を遂げた。この二人の人物が詩人を動かして出來上つたこの詩は極めて價値ある思想の連鎖であつて、理想的人間の研究として傑作である。神と靈魂不滅を信ずる作者の信念は最も純粹に崇高く現はれてゐる。

ティンタン寺の川上で詠んだ歌

『抒情詩集』の卷末に收められた作者會心の作で、彼の思想を最もよく表し、多くの批評家によつて傑作とせられた名篇で、かの『永生の頌』と並び稱せられ、或は之れよりも傑れてゐると評した人もある。

大陸旅行を終へて一七九三年の夏、二十四歳の詩人は暫らく不幸な定まらぬ精神狀態にあつた。此時彼は唯一人サリスベリ平野からウェイルズにかけて徒步旅行をしたことがある。この時彼は初めてマンマスシアのワイ河を訪れた。溪谷の美を以て名高いワイ河はセヴアン河と合してブリストル灣に注ぎ、長さは百三十哩で、わが木曾川より少し長く、山地を走る急流である。それから五年後の一七九八年七月十三日に再び妹と共にこの地を訪れてこの詩を作つたもので、その年に公にした。この五年間に彼の生活は一層幸福になり、彼の知識や自然及び人間に對する愛を深め、事物の生命を見る洞察力を彼に與へた。この詩に漲る懷舊的氣分を知るに難くない。

詩人はいふ、「私の詩の中で回想してこれほど樂しい環

境の下に作られたものはない。ワイ河を渡つてから、ティンタン寺を去る時、私はこの詩を作り始め、妹と共に四五日間漫歩の後、夕方ブリストルに入らうとした時に恰度完成した。一行も刪正せず、ブリストルに着く迄は一[illegible]かつた」と。これを見ても如何に天來の[illegible]の詩を作つたかといふことが分る。ティンタン寺は一三一一年に創立せられたシイトオ教派の修道院で、河口を數哩溯つた所にある「世界で最も美しい廢跡」として、ワイ河の右岸に位してゐる。この詩の出來たワイ谷は英國で最も美しい河景である。

この詩に於て作者は自然の意味に就いて一層新しく深い洞察をなしてゐる。彼の思想感情に及ぼした自然の影響は最も明かに完全に現はれてゐる。作者獨特の自然觀を知るには必ずこの詩を讀まなくてはならぬ。マイアズの言つたやうに、この詩は「クラシックスの拔萃集であり、ワアヅワスの信仰を聖別した信條書」である。國木田獨歩もこの詩を愛好して書中に引用してゐる。

この詩の主旨を便宜のため分類して見よう。

(一)、緒言的回顧(「流れる水の音を聞き」まで)
(二)場景の描寫(「焚火するのであらう?」まで)
(三)自然の美の思出から生ずる感化と快樂(「わが魂の汝に赴いたこと」まで)
(四)眼前の場景の實際的熟視から起る思[illegible]の刹那にあることを思ひ喜ぶ」まで)
(五)彼の青年時代に與へた自然の感化(「その時[illegible]に去つた」まで)
(六)成熟期の一層深刻な感情(「私は嬉しく思ふのだ」まで)
(七)妹への話掛け(最後まで)

サマヴェルはこの最後の章が全體の效果を弱めるといつてゐる。尙『人生の靜かな悲曲』、"The still, sad music of humanity" といふ句はテニスンが英語の中で最も莊嚴なものとすると激賞した名句である。

物語詩

私等は七人

一七九三年ワイ河の流を訪ねた時、グッドリッチ城の境内で出遇つた小娘との問答に基いて作つた可憐な詩。それから五年後の一七九八年の春(二十九歳)、アルフォックスデンの森を散歩しながら書いたもので、最後の齣の最後の行が最初に出來たものである。殆ど作り終つてからコウルリッヂとドラシイに讀んで聞かせ、序詩となる最初の齣をコウルリッヂに相談した所、彼は即座に、"A little child, dear brother Jem"(一七九八年の『抒情詩集』には"A Simple child, dear brother Jim" となつてゐて、一八一五年までこの句になつてゐた)の句を與へて、それが今日のやうに改訂されたのである。

彼は死の問題を靜謐と子供のやうな單純さで取扱つてゐる。靈魂不滅の問題の解決は思慮を廻す知識ですべきでなくて、天の敎へた子供の智慧——思念が感覺によつて汚されず、「榮光の棚曳く雲」の消えぬ內の智慧によつてなされるものであるといふ作者は、この詩で單純無邪氣な子供の口を藉りて永生を歌つたもので、いとけない子供の心には、生も死もない。この世を去つた親しい者は、子供の心には生きてゐるのである。けれど大人になると浮世の知識に禍されて、生と死とが一つであるといふ信念が打破され、闇路を迷ふのである。眞理の天國に入るためには、幼兒のやうな純な心をもつ必要があるといふのが、ワアヅワスの人生觀の根本義である。單純な言葉で、快活な無邪氣な子供の生命の美と陰氣な死との間の「考へ深い對照」が描かれて『永生の頌』の思想の一斑を示してゐる傑作の一つ。

コンウェイ。北ウェイルズの港町の名。

ルウシイ・グレイ(孤獨)

ゴスラア滯在中の作。事件はヨオクシアのハリファックスから程遠からぬ所に住んでゐた一少女が、吹雪で行方不明になつたことを妹から聞いて書いたものである。兩親は彼女の足跡を水道の堰の眞中まで辿ることが出來たが、彼女の姿は終に見えなかつた。後に彼女は水道で溺

死してゐたといふことである。

この詩は作者が前年公にした『抒情詩集』中の詩論を裏書する一つの例證となるもので、作者はかういつてゐる、「この事件を取扱つた方法と、性格の靈化は、日常生活に投げようとした想像的感化力に就いて、同種類の題材を取扱つてゐるクラブの實際的の形式と對照する暗示を與へるものであらう」と。實在を想像で色彩るといふ彼の持論はこの詩で明かに示されてゐる。

この詩のルウシイは『ルウシイ・ボエムズ』のルウシイとは全く別人である。尙別題の『孤獨』は四行と五行の氣持をいひ表したものである。

アリス・フェル（貧困）

グラスゴオのグラハムを喜ばすために書いたもの。彼はクラアクスンの熱心な助力者で、熱烈な人道主義者であつた。この事件は彼自身に起つたことで彼は詩にするやうに私に勸めたものである。（ワアヅワス）

この詩はラムが愛好したものであるが、一般批評家にとつては遊び事のやうなものであり、一般の讀者も嫌つたものであるが、これは一つはワアヅワスの詩集から政策のために除かれてゐたからだとブラドリはいつてゐる。詩人の詩的信條をよく例證してゐる詩で、ブラドリ教授も賞讃してゐる。

手飼の仔羊

この詩は詩人が、唯一人の人間に對して道德的不正をなしたと責めることの出來る作者唯一の詩であるとマイアズはいつてゐる。作者は一八四三年に言つてゐる、「バアバラ・ルウスウェイトは實際、この詩の中に描いてある樣に私が見て立ち聞きした子供ではなかつた。私は上に述べてある（即ち、彼女が非常に美しいために）この名を選んだ。そして玆で現存してゐる人の名を用ゐたことに對して注意を加へて置かう。この詩を公にして數ヶ月内に私は非常に驚き又心を痛めた。といふのは、それがリンドリ・マリイ氏によつて編輯せられた子供の教科書の中に入れられて、バアバラが行つてゐたグラアスミアの學校で用ゐられるやうになつたからである。そして彼女がかやうに名を擧げられたことを非常に自慢してゐると聞いて私は殘念に思つた。後年彼女はこの出來事を記憶し、その時私の言つたことを覺えてゐると口癖に言つてゐた」と。

この詩は『私等は七人』等と同じく、田舍の子供の美しさが自然その物の中に溶け入つてゐる可憐な詩である。

貧しいスウザンの幻想

註に「この詩は靜かな快い春の朝、ロンドン街中に、こんな風にして懸つてゐる（籠に入れてある）鳥の心を動かす音樂に聽き入つて思ひついたものである」と。それはドラシイと共に一七九七年、倫敦にゐる兄弟のリチャアドを一寸訪問した時のことで、恐らくそれから少し後に書いたものであらう。

この詩は純粹な感情もつた詩人によつて外觀を裝はぬ言葉で書かれたことを例證する驚くべき詩である。

尙當時は晴れた朝ウェストミンスタ橋から明かに郊外の野原を見ることが出來た。

自然の魂は街衢の中（『序曲』七篇七六五――七七一參照）にも、最も不潔な環境の中に於てすら彼に附き纏つてゐた。この經驗は既に初期のこの詩にその萠芽を見せてゐる。喧騷雜閙を極めてロンドンの大都市の裡に自然物を見出して、街巷を大自然に同化せしめる彼の特色を發揮した詩である。幻想と記憶の突如として閃めいて來た刹那を描いた詩の中で、この詩よりも微妙なものはない。（マイアズ）

貧しいスウザン。田舍から來た貧乏な下女か何かであらう。

ウッド街。ロスベリ。チイプサイド。何れも倫敦の商業區の中心にある往來の名で、英蘭銀行の附近。

マアガレットの惱み

グラアスミアのタウン・エンドで書いた詩。これはペンリスの町に住んでゐた哀れな寡婦を題材にしたもので、この女の悲境は、夫人や妹は勿論のこと、町中の人がよく知つてゐる事であつた。彼女は店を開き、誰か知らぬ人が通りかゝると、往來へ出て行つて、わが子の行方を訊ねたといふことである。

最も賤しい生活に實相に接近した者でなくてはこんな詩を描くことは出來ない。谷男がいふやうに、彼は親切で、病人がある時は、それを看護に行つた程である。かうした經驗が他人の苦痛に十分に同感することが出來た。かうした日常の出來事を巧みに詩化した點で、この詩は有名である。悲痛の感の強い點で、英國の抒情詩の内で、これに比較せられるものはないといつた評者さへある。ラスキンは『近代畫家論』（三卷、第四編三章）の中で、この詩を、「歴史的又は單純な物語詩的藝術と偉大な想像的藝術との相異を示すもの」として引用してゐる。この詩は同じ樣に母の惱みを取扱つたテニスンの『リズバ』と比較せられる。

尙この詩に關してはマイアズが評傳（一〇七——一〇九頁）で詳しく解剖してゐる。

七人の姉妹

この詩の物語は、フリデリカ・ブルンの獨逸文からとつたもの。（ワアヅワス）

レイオダマイア

一八一四年はワアヅワスの詩的生涯に一時期を劃してゐる。彼の長男を大學へ入れる準備のため、拉典の作家殊にヴァーヂルを熟讀する機會を得た。『イニイド』の第六卷はこの崇高い哀切な詩を彼に暗示した。

レイオダマイアはトロイで殺されたプロテシレイアスの妻であつた。プロテシレイアスはアガメンノンの軍隊に於けるセセイリアの大將であつた。ギリシヤの軍隊がアウリスで逆風に阻まれて碇泊してゐる時、神託は、次ぎの戰ひの勝利は最初の武士を失ふ側にあると告げた。そこでプロテシレイアスは國のために一身を犧牲にしようとした。トロイに着くと彼は第一に岸邊に跳び上つて、ヘクタアの劍で殺された。これはトロイの岸を眞先に踏むギリシヤ人はデルファイの神託によつて死の運命を與へられてゐたからである。レイオダマイアは亡夫と唯三時間丈會談する許しを神に請ひ、其許しを得たが、その三時間が終つて、彼女は亡夫に伴つて黄泉の國へ降つた。そして自殺したともいひ、ワアヅワスに從へば失意の餘り死んだといふ。詩人はレイオダマイアが亡夫に逢ふ所から始めてゐる。

レイオダマイアは古代希臘の詩人にとつては溢れてゐる情熱の典型となつてゐた。そしてこの物語はワアヅワスの崇高な思想を傳へるのに最もよく適してゐたのである。彼の註に、「ライダル山での作。生長し枯れてゆく木の出來事（詩の最後の一節參照）が私の思想に題材を與へたので、私の知る範圍では、これを扱つた古代の誰よりも、一層高い調子をそれに與へたいと思つて書いた。私が今迄書いた同じ長さの詩のどれよりも勞作であつた」と。彼が如何に抱負を以て努力して作つたかゞ思はれる。その努力は報いられてランダア、オーブリ・デ・ヴィアを始め、ハズリット等の多くの批評家によつて激賞せられてゐる。

この詩の本領は熱情的なレイオダマイアが人間の慾情を滿足させようとして失敗するところにあるので、感能的物質的な存在を否定するプラトンの思想の反映もある。全篇の調子は古典的美と完成の最も美しく豐かな表現であつて、ギリシヤ藝術の壯大な單純性をよく捉へてゐる。ワアヅワスの詩の中でこれほど思想と言葉の崇高さと調子の靜謐さをもつたものはない。『マイケル』及び『ひとり麥刈る乙女』と對照せよ。

ヘクタア。プリアムの長男で、トロイ戰役の主將。

セセイリア。プロテシレイアスの故鄕。

ハアキユリイズ。强力。彼の最後の力業は冥界から地獄の番犬を連れ戻ることで、それと同時に夫の命を救ふために自から死に赴いたアルセスティスを連れ歸つた。アルセスティスはレイオダマイアの叔母。

ミディア。魔法使のミディアはその夫ジェーソンの父イソーンの血管に藥草の液を注いで、その老人を若返らせた。ミディアに欺かれて老父ペリアスを若返らせ損ねた娘達は、レイオダマイアの叔母であつた。

アウリスの艦隊。希臘の艦隊がトロイに向つて進軍しようとした時、總大將のアガメンモンが女神アルテミスの怒を買つた爲、逆風を受けて船が進まなかつた處が、この女神の怒を和げるためにアガメンモンはその娘のイフィゲニアを犧牲として順風を得ることゝなつた。

ヘリスポンド。今日のダアダネルス海峽。

水蛭取る人（決心と獨立）

ワアヅワスは、ドラシイと共に一七九九年の暮に、グラアスミヤの町外れにある『鳩の家』に移つた。彼の傑作は概ね此の居で出來たものである。この詩に就いて作者はかう語つてゐる。「私の家から數百碼隔てた所で、私は此の老人に會つた。彼に就いての記述は彼自身から語つた言葉から取つたものである。アルズウオタアの麓にあるクラアクスンの家から、バアトンの丘を横切つてアスカムに行く途中、此の詩の初めに述べたやうな心的狀態にあつた。其の時私は此の丘の背に兎の姿を見た」と。又ドラシイの一八〇〇年十月三日の日記には、次のやうに書いてある。「私達は殆ど腰の折れかかつたやうな一人の老人に出會つた……彼の商賣は水蛭取りであつた。其の時は日も暮れて遲い時刻であつた。」

これに由つて見ると、此の詩に集められてゐる要素は、いろ〳〵な物から取られたものである。此の詩は最初は『水蛭取る人』と呼ばれたが、後に『決心と獨立』といふ題目にせられた。作者は本篇で自然人事に對する心理的反應の微妙な過程を說明してゐる。こゝにマイアズ教授はこれを批評して、詩人の魂が自然と共力し、自然の囁く聲を半ば創造する事を意味するものであると云つてゐる。此の詩に就いて一友人に宛てた手紙は、彼の心的狀態を知るに甚だ必要であるから、左にそれを引用しよう。

「私は其の詩を書いた時の感情を、散文で說明しよう。私は先づ自然の喜びと美に依つて、私が喜悅の絕頂に達した事を述べ、それからそれらの美しい事物の唯中に在つてさへも、私が喪心絕望のどん底に陷つたことを述べてゐる。自然の幸福の唯中に在る靑年詩人が、人間中の最も幸福なるもの卽ち、詩人の身に振り懸つた禍を思つて、悲嘆にくれてゐる樣を描く。私はこの事を考へると深く心を動かされるのであつて、私の喪心絕望から救ひ出された事は殆ど、神の攝理でないかとさへ思ふ。私自身のやうな感じであの詩を讀む人は何か靈的な超自然的なあるものが現はれると思つて、畏怖の念を懷くであらう。何が持出されるか？　一つの寂しい場所、池、その傍には全く人里を離れて一人の老人がゐた。立つてゐたのでもなく、坐つてゐたのでもなく、唯ゐたのだ――此上もなく單純に赤裸々に現はれてゐた。この章句で私の心中に靈的な超自然的な感じの强いことが再び述べてある。彼はどうして此處へ來たか？　一體何をしてゐたのだらうと私は考へた。それから私は彼を描く。その巧拙は十分な自信を以て判斷出來ないが、唯一つ私の斷言して憚らないことは、神が强い想像力を私に與へてゐるけれど、この老人のやうに深い感銘を與へる人物を想像し得ないといふことである。彼は妻と十人の子供に先立たれ、唯一人山中や、あらゆる寂しい場所を旅して、不當な社會制度が彼の身に負はした困苦缺乏を忍んで行くのである。……然し、あゝ！あの場所へあの人物とは。信心深い自重的な、痛ましくも老い朽ちた、そして滿足してゐる老人が、あの物語をするとは何といふ不思議な事だらう！」

この一文は詩人の反抗的な理窟つぽい性格の一面を示すと共に、彼の純朴な心持、純な優しさを現はしてゐる。別題を『決心と獨立』としたのは、彼がこの水蛭取りの健氣なさまを見て、詩人の天職に身を殉じようと決心し、その精神的獨立を恢復したことを示すのである。

「この詩の本質から二つの觀念の連續を見出す。卽ち自然の情調と人間の情調との相互作用である。人類としての人間の威嚴と興味が、社會的又は政治的生活の複雜な背景を以てしないで、原始的な愛情と悲哀、外界の幻想的な姿の中に置かれて描かれてゐる。」（マイアズ）

鹿飛ぶ泉

『鳩の家』の作。最初の八つの齣は、『兄弟』を作つて行き詰つた時、心機一轉のために、ある多の夕べ卽興的に作つたものである。作者が妹と共にその前年（一七九九年）十二月ヨオクシアのソックバンからグラアスミアへの旅行の途次、この泉を通過し、そこで逢つた老人から聞いた話を土臺としたものである。「心なき荒武者の單純な喜びと、內省的な詩人一流の思想の對照に興味がある。動物の苦しみを歌つたこの詩はコウルリッヂの『老水夫の歌』と共通な動機をもつてゐる。十八世紀によつて新しく醒めた感覺と人道は下等の動物にまで現はれた。詩人にとつてはこの鹿は一個の獨立した獸としてゞなく、自然の大なる友愛の一員として、その苦しみに同感してゐる。

高調詩

比ひ稀なる光耀美の夕べに作る

ライダル山の家の前方にある丘でこの詩想を得、且つその大部分を作つたもの。『夕暮即興詩』の一つ。夕映に自然の聖美に打たれて未來の鄕國を望んだ詩で、『永生の頌』とその精神は同じものである。かの詩の純潔、莊嚴、優美、單純は至高な平和の要素を以てこゝに再現せられてゐる。マイアズ教授の言つたやうに、「ワアヅワスの天才の最後の著明な所産」であり、彼の詩人的生涯を終る一大象徴的壯觀であり、莊嚴な告別である。その詩にこそ「魔力的な單純、いはゞ自然現象の最高の美德を以て再現する特殊の天賦の才能」を認めるのである。

義務の頌

『幸福な武士』と共にワアヅワスの教訓詩の内で最も傑れたものである。玆に冷い節制と溫かい同情をもつた道德の間に本質的な永久的な差別がある。彼は純眞で赤裸裸の單純さの中に道德律の力又は魅力を我々に感ぜしめる。これ丈の範圍で、義務の起原、性質、要求を、かくも眞實に莊嚴に叙べた英詩が何處にあらうか。ワアヅワスにとつては、美德は眞の幸福に至る唯一の路である。而して道德的努力は、永久の法則の要求に調和してゐる自然界に現はれる豐富な喜悅に生ずることを彼は教へてゐる。この思想がこの詩の主題でこの義務に從つて人生を歩むことを望んだ道德詩で、題材に適するために飾りはないが、詩人の最善の手法を示す例として、この頌は實に名篇といふべきである。詩人の語る所によれば、この頌はホレイスの『幸運への頌』を模倣したグレイの『不幸への頌』をモデルとしたものであると。最後の結句、殊に終の二行が壯大である。

「私は寧ろ自然の子となつて、言葉で書いた感激のない散文道德よりも、ワアヅワスの『義務の頌』の高尙な想像的な教へを感知したい」――ヘンリイ・リイド。

トマス・ハアディは「何となく嚴酷だ」と評したが、恐らく最後の節を忘れたからであらう。

幼時を憶うて永生を識る頌

詩人の自然觀、人生觀を最も明かに現した大作であり、傑作であり、代表作であるこの詩は、この範圍の廣大なるに於て、思想の深玄なるに於て、英國浪曼派運動の最大詩といつてよい。『ワアヅワス福音書』と名附けられるのも當然である。この詩の一部分は一八〇三年（三十三歲）に、半ばは同六年に作つたものである。作者が本文の結尾に附した註釋は、この詩を理解するのに役立つので、その大意を左に譯出しよう。

「これはグラアスミアのタウン・エンドに滯在中の作である。初めの四齣と後の部分との著作の間には少くとも二年を經過した。細心堪能な讀者には自から全部十分に解せられることゝ思ふが、この詩を作つた時の基礎となる自分自身の特殊な感情又は經驗を玆で語ることも强ち無用な業ではあるまい。私の幼時は、死といふやうなことが自分のやうな身上に來るとは信ずることが出來なかつた。私は曾て歌つた――

あどけない幼兒
輕く呼吸して
手足に生命が充ちてゐる、
死なんてどうして知らう？

かう考へたのは必ずしも子供の動物的生氣の熾んなためではなくて、私が心の内に動く靈性の制し難いものゝあることを感じたからである。私はイノックやイリアの物語を常に考へて、果ては他人はどんなにあつても、自分は同じやうな方法で生きながら昇天したいと考へた。この感情を以て、外界の物象を見ても單なる外的存在とは考へられなかつた。そして、それらはわが身に等しい靈性であつて、わが身とは離すべからず、我身と同體のものと思つた。小學校に通つてゐた時でもこの觀念論に恍惚として我を忘れ、木や塀を捉んで我に還つたことも度度あつた。（中略）幼時に目擊する物象の、夢見るやうに、且つ生けるが如く美しいことは、誰もが容易く冐想し得る所と思はれるので、こゝでは說くに及ばぬ。けれども私はこの事を以て人間に前生があるといふ證左と看做してこの詩の中に書いたので、世の敬虔なる人々の誤解を招き、私がかやうな信仰を說くものだと思はれるかも知

れない。かやうな思想は甚だ漠然たるもので永生に關する我々の本能に於ける一要素であつて、敢て信仰として望むべきものではない。然しこの考へは默示錄にも見えないとはいへ、これと矛盾するやうな記事もなく、且つ人間墮落の一事はこの說と類似してゐる點がある。そこで、靈魂先在說は多くの國民のありふれた信條となつて、古典文學に通じてゐる者には、プラトン哲學の如きもこの思想に胚胎してゐることが知られてゐる。アルキメディスも、自分の機械を据ゑる所があつたならば、世界を動かすことが出來るだらうといつた。自分の心の世界に對してこれと同樣の感を懷かぬ人があらうか？　感興に驅られて靈魂不滅の詩を物するとき、その心界の要素を左右するの必要を感じたので、その靈魂先在の說の人間に置いて十分根柢あることを思ひ、詩人として出來る丈利用して、わが作詩の目的とした。』

彼の所說を一言にしていへば、人間の靈魂は神から發したもので、それがこの世に現はれる時は優れた靈性を有してゐる。然るに世俗的な空氣に侵されて、次第に靈性が衰へるので、我々は深い反省と自然に充ちてゐる靈力と交通して、幼時の直覺的信仰を失はぬやうにしなければならぬといふ哲學を、プラトンの哲學を以て根據づけ、意識的にこの說の信念に立脚して自己の思想を最も明瞭に且つ强烈に述べたものである。

この難解な詩は當時種々の非難を受けて、これを解する者はなかつたが、近代に至つてその眞價は認められ、エマスンは十九世紀英國思想の最高潮標なりといひ、シヤアプは「ミルトン時代以來の英國に於ける詩的靈感の最高潮である」といひ、ナイトもワアヅワスの最大の詩であるといつた。キリアム・ブレイクも推賞してやまなかつたもので、彼の基本觀念がワアヅワスの詩はヘンリ・ボオン（Henry Vaughan）の『隱退』（The Retreat）に暗示されてゐるといはれてゐるが、イングも辯明してゐる通り、決して模倣ではない。かうした哲學的詩は現代的興味を惹き難いが、技巧のない一種淸新な新技巧が詩の根元思想を泉の如く滾々として湧き立たせ、繰返し讀む時は淸らかな快美を感ぜずにはゐられない。この詩は『ティンタン寺』と併せ讀む時一層作者の思想をよく了解せられる。

便宜のため、左に全篇の思想を表解しよう。

(一)　幼時には自然は悉く淸新と美を以てゐたが、今はもはやそれを見る力がない。

(二)　外觀は尙美しいが、昔の光耀は去つた。

(三)　周圍の喜びにも拘らず、私の悲しみが陰鬱ならしめる。然しその感じを取り除いて地の春の喜びを十分味はれる。

こゝ迄が十二年前に書かれたものだらう。

(四)　一般の喜びに同じようとしたが、周圍にある者は昔の榮光のすぎ去つたことを想はせる。

(五)　こゝより詩の本旨に入る。詩人はこの失はれた感じの起原を尋ね始める。我々は先在からこの世に生れた。神から來たものであるから、神々しさの痕跡をもつてゐる。然しそれは次第に褪せて、大人になると失せてしまふ。

(六)　親切な乳母である地は、種々の喜びを具へて、我我の昔の天の故鄕を忘れさせる。

(七)　前節の說明で子供はこの世の事柄に身を入れて、絕えず行爲を模倣し、大人の後を追ふ。

(八)　純潔無垢の子供が餘りに早く地の墮落に終り背後にあるものを忘れることを歎いてゐる。

(九)　然し幼時の榮光がまだ殘つてゐることを感謝すべきである。（作者の心髓がこゝにある）

(一〇)　そこで我々は自然の春の喜びに尙加ることが出來る。何故ならば古い光耀は去つても、自然に對する初期の同感は殘つてゐて、成熟すると共に、力と、悲しみの喜びと、未來に於ける信仰が起つて來るから。

(二)　詩人は自然に對して、前よりも一層深い愛を懷いてゐる。

尙この詩に就いてはラスキンの『近代畫家論』の中の『典型美』（第三部第五章）に就いての一文を見よ。

最後にある「いと微かな花も……」といふ句はよく引用せられる名句で、スコットも『マアミオン』の第一の序詩で使つてゐる。

十四行詩

ウェストミンスタア橋上にて

一八〇二年詩人は妹と共にカレイで一ヶ月間の休暇を送ることになつた。七月卅一日に倫敦を出發してドオヴァに向ふ途中、朝早くテムズ河に架してあるウェストミンスタア橋（市部とウエスミンスタア（大本山のある所）を連絡する）を渡る時、市街の美しい景色と、眠れる群衆の思ひが、詩人をしてこの最も美しい、又最も善い、最も愛すべき短詩を作らせた。彼は馬車の屋根の上で書いたといふ。妹の日記に、「ドオヴァの馬車に乘つて朝の五時と六時の間に倫敦を去る。美しい朝だ。市部、聖ポオロ寺も、川も――多くの舟も、ウェストミンスタア橋を渡つた時に美しい光景となつた。家には煙の雲もかゝらず、限りもないやうに擴がつてゐた。しかも清らかな光を投げて煌々と輝いてゐたので、自然の神の偉大な眼鏡の一つの純潔に似た或物があつた」と。詩の表題に「九月三日」とあるのは思ひ違である。ナイト教授のいふ所によれば詩人の日附は常に信ずることは出來ないと。

ワアヅワスは都會と都會生活を詛つたが、この詩は彼が倫敦を讃美した唯一の詩である。それは眠つてゐる靜寂な都會を見たからである。スタァリングがその臨終の牀で見た倫敦――騷擾と塵埃と混雜の充ちた所でなくて、何となく靜かで、堂々として永久的な――を見た（マイアズ）。言葉の單純と優美なるとに於て、情操の威嚴と純潔なるに於て、形式の一樣と簡潔なるに於て、その比を見ない崇高な短詩である。佛蘭西のコロオの同じ題の繪よりもこの詩が優れてゐるとリッグスはいつてゐる。

一八〇二年倫敦にて

詩人は言ふ、「これは私が佛蘭西から歸つた後間もなく作つたもので、玆に描いたやうに、革命後の佛蘭西の靜寂、寧ろ荒寥と對照して、我國、殊に大都市に於ける虛榮と華飾に驚かざるを得なかつた。さもなくば讀者はこの詩及び次ぎのソネットで、擾されぬ富によつて我々の間に生じた不幸を誇張したものと考へるかも知れないから」と。奈翁は歐洲の大半を蹂躙して、佛蘭西に君臨した當時、英國は戰爭のために富力と人口とが增加し、賃金は下落して、穀物類は騰貴し、地主と百姓の富む代りに、勞働者は益々貧窮に陷り、それと共に犯罪者が增加し、終に階級爭鬪が起きて今日の社會問題の發端を開くやうになつた。政治界にも一貫した主義もなく、朋黨の紛爭と阿世的な策略が行はれ、反動のみで進歩的な運動もなかつた。ピットも、利慾にのみ汲汲たる資本家や惡議員に妨げられてその改革方案を葬られて首相の職を辭した。奈翁と屈辱的平和條約を結び、僅かに少康を得て道德の腐敗に沈淪してゐた時代であつた。ワアヅワスは八月三十日から九月二十二日迄倫敦に滯在中ミルトン以來の立派な數篇の政治的ソネットを作つて國民的生活の改革を叫んだ。これらのソネットは彼が初期に懷いた佛蘭西革命への失望が、英國の義務と使命に就いての彼の高い理想を捨てさせなかつた證左である。十一行は有名な句。

美しい夕べ

一八〇二年の八月、フランスのカレイ附近の濱邊で作つた詩で、同年に作つた『ウェストミンスタア橋上』で歌つた朝日の歌と對比すべき名詩である。ある點に於ては最も善いソネットである。最初の八行は自然的で靈的な靜謐の繪を描いて叙述的である。次いでこの美しい景色を少しも頓着せぬ少女に振り向く。然し彼は少女に過失を認めない。子供は尙も天に近づいてゐるから、地の美に天の便りを讀み解く必要はない。ワアヅワスの『快い靜けさ』と『慰めの力』はこゝに例證せられてゐる。

この中に現はれる少女はドラシイと考へられてゐたが、ハアバアやレグイの研究によつてこれが詩人の私生兒カロラインであつて、ドラシイの日記にあるアンネットがその母であることが分るに至つた。

ミルトンに

英國の危險に瀕してゐる時、正義と自由の戰士であり豫言者であるミルトンを呼んで、かゝる偉人が出現して、道德、政治、宗教、家庭の腐敗を一掃せんことを冀うたのは當然である。ミルトンの犧牲、價値の一言一句は卽ち詩人が理想の人格及び生活の提唱である。ワアヅワスはミルトンを崇拜し、『神聖なミルトン』と稱へたことも

ある。この詩は詩人が詩人に與へた詩の中で最も立派なものである。『序曲』第三編を見よ。

ヴェニス獨立の消滅

ヴェニスの共和國は十五世にはその絶頂に達して國威を放つてゐたが、一七九七年ナポレオンによつて侵略せられ、一八一四年オーストリアに與へられた。

この詩は作者が『國民の自由と獨立に獻げたソネット』と類別した中に入れた一つ。

瑞西の服從と英國

一七九八年にナポレオンは瑞西を服從させてフランスの屬國とした。この詩が書かれた一八〇七年には、彼は歐洲大陸の覇王となつた。そして英國を侵略する準備を始めてゐたので、國民の感情は激昂した。スコット、サウジイ、ワアヅワス、コウルリッヂ等はこの感情を詩に繰返し歌つた。この詩は一八〇三年の仲裁條約に暗示されたものである。ハドスンは「これは私の所謂完全な作である。……物象でもなく、言葉でもなくて、觀念の幻影を助けるものである」といひ、詩人自からも傑作と考へた。

トゥサン・ルウベルティュルに

フランシス・ドミニイク・トゥサンは一七四三年サン・ドミンゴのブダに生れた。父母は共にアフリカから來た奴隷であつた。奴隷の子として生れた彼は、政治上王黨に傾いて居たが一七九三[illegible]ス議會が奴隷に自由を與へるに及んで、共和黨の[illegible]つた。そこで彼は、サン・ドミンゴのフランス軍の[illegible]られ、英軍や西軍を征服した。ラポオが其の功勞を[illegible]から、ルウベルティュルと呼ばれる樣になつた。一八〇[illegible]ポレオンが再び此の島に奴隷制度を布くや、トゥサ[illegible]反對した爲めにナポレオンは艦隊を送つて彼を[illegible]家族の自由を保證すると欺いて、彼を降參さ[illegible]を捕へて、何等の裁判もせずにパリの牢獄に投じた。彼は遂に十ヶ月の後一八〇三年四月獄中で餓死した。この詩は、彼の入獄後二ヶ月目に書かれたもので、政治的ソネットの一篇である。作者の情熱はミルトンのそれの樣に、嚴然と燃え上つた崇高な昂揚を示してゐる。狹圍の國民性を超越してゐる神聖な同情は各行に發露してゐる。バイロンの『シヨン囚人』と比較せよ。

レイズリイ・カルヴァアトの思出に

一七九四年ワアヅワスが將來の計畫を決定してゐない時、友人の兄弟カルヴァアトが肺病に罹つたので、彼は看病したが其の甲斐もなくて、翌年此の世を去つた。其の際カルヴァアトは、九百磅を詩人に送り、詩人が目下の生活難を逃れて詩作に一身を捧げ、人類の爲めに其の天賦の才を發揮するようにと遺言した。此の事は詩人の經歷に轉換期を與へた。即ち彼は、これに由つて獨立の生計を立てる事が出來るやうになり、一七九五年に彼は妹と共にレイスダウンに一戸を構へた。此の一篇はガルヴァアトの死後數年にして、詩人が其の深い感謝の意を表はす爲めに作つたものである。『序曲』(第十四卷第二篇、三五四——三六九)を參照。

トマス・クラアクスンに

クラアクスンはケンブリッヂ大學在學時代から、當時盛んに行はれてゐたアフリカ黑人を商品扱ひにする奴隷賣買の廢止に努力した。彼に對する猛烈な反對があつたが、遂に一八〇七年三月に奴隷賣買廢止案を通過させて十年間の努力が酬いられた。ワアヅワスはこの人道の闘士に、敬意を表する爲めに此の情熱に充ちたソネットを作つた。ブレイクの『黑ん坊の子供』を參照。

戀、戰、又は紛々たる政爭

眞善美は浮世の闘爭のある所にのみあるのではない。詩神は平和のある所にも宿る。否反つて靜謐であり優美であり微小である所に、深い美があるといふのが此の一篇の主意であつて、殊に最後の「匂ひいとも妙なる花は微で小さい」といふ句の如きは、作者の美しい思想が美はしく出てゐる名句である。

十四行詩を侮るな

一八二七年ライダル湖の西側を散歩中、殆ど即興的に作つた詩で、彼のソネットの序として取扱つてゐる詩集もある。「この詩には美妙な想像力の觸感に豐富にされ、

純粹な力絶し語法で傳へてゐる歴史があると共に、最も力強い生氣から最も柔かい韻律的調音の調べに至る音樂的變更がある。」（ヂョウヂ）

沙翁。ソネット百五十四篇の内、二十八篇は女に與へたものであるが、何人に與へられたか不明である。

ペトラルカ。ラウラに對する切ない戀をそのいみじきソネットに現して慰めた。

タッソオ。エレオノラに寄せた二卷のソネットがある。

カモエンス。ポルトガルの詩人。若い時、宮中の貴女に戀歌を送つて配罪にされ、後諷詩を書いたゝめ一五五六年支那の厦門に流された時多くのソネットを作つた。彼の戀人カテリナの訃報を彼がゴアにゐた時に聞いた。

ダンテ。彼は五十五以上のソネットを書いたが、『新生』にはその半ばを含んでゐる。それらは一三〇〇年本國を追はれて流浪の苦痛（絲杉は葬式に用ふ）を味ふ前の比較的幸福な時代（桃金孃は愛に因んだ木）に書かれたからである。

スペンサア。妻エリザベスに寄せた戀のソネット八十八篇を作つた。『暗い道』とは彼が一五八六年愛蘭に土地を與へられ、流刑者のやうに寂しい日を送つたこと。

ミルトン。彼のソネットは一六三〇年（二十三歳）より一六五八年の間に書かれ、二十三篇のソネットの内で五篇は伊太利語で書いた。僅か十八の内で、十六のソネットは内亂の時代――彼の詩作力も衰へた時――に物した。ワアヅワスがこゝで喇叭に比較してゐるのはこの時代の政治的ソネットである。一六五二年には盲目となつて妻を失ひ、再度の妻は一六五八年に又倒れたといふ悲慘な晩年はミルトンをしてソネットを書かしめた。

尼僧よ僧庵の狹い部屋で惱むな

ワアヅワスは一八〇一年からソネットを使ひ始めたが、或る日の午後妹が彼にミルトンのソネットを讀んで聞かせると、彼は既にそれらの詩を知つてゐたので、特にその威嚴、單純、莊嚴な調和に動かされ、直ちにソネットを作つたが、その一つ『ボナパルトを悼む』のてゐる丈である。このソネットと次ぎのソネット中のソネットで、ソネットに對する一種の讃と見るべきものである。彼はソネットに對する世人の偏見を認め、それを元の位置に歸さうとする教訓詩の一つである。ヘンリ・テイラアの『ワアヅワスのソネット』を見よ。

ファネス山。英蘭の北東部にあるウェストモアランドにある山で、詩人が永い間住んでゐた所。

俗事が餘りに支配しすぎる

この短詩は多くの點に於て、『ティンタン・アベイ』の擬言である。彼は「單純な生活と高尚な思索」を主張してゐる。そしてこの持論が無視せられた時彼は反抗の詩を作るのであつた。この詩は眞に吾々の生活を價値あらしめようとすることをすべて調子外れにする俗物の商業生活に對する火のやうな反抗の聲である。詩人は吾々に自然と接觸し、自然の美を味ふ眼を持ち、自然の佳調を聞く耳を、自然の祕密を理解する同感的な心をもつことを戀へてゐる。唯名目丈の基督教徒で、俗事に心を奪はれて名利を追求し、自然の美を感じ、自然の靈氣と同感する力を失つた世界にゐるよりも教義は異教のものでもよい、寧ろギリシャ人のやうな樂しい異教主義に赴いて自然の靈氣に對する純な嘆美の心を持ちたいと。

他のソネットに見るやうな前節と後節との間に隔絶のないことである。即ち前八行は人間が自然と調和を失ふことを示し、後五行ではホオマア時代の單純な信條に歸ることの勝利を說いてゐる。サマヴェル氏はワアヅワスの詩の内で最も美しいものと讃美してゐる。『逍遙篇』（四篇六一三――六三〇）を參照。

プロテュウス。海の老人。

トリトン。海の神ポセイドン（ネプテュウン）の息子で、波を靜めるために貝殼を吹く。何れも異教國にゐることが自然の靈に觸れることの多いことを例示したもの。

ハイランドの伏屋

一八三一年の秋、妹と共にスコットランドを旅行中に、一茅屋を見て作つた。社會から忘れられてゐる部分にも美しい詩題を求めようとしたワアヅワスは、卑近なものをも感動せしめるものとした。普遍的自然に對する敬虔を教へ、人間の心と心の間の因襲の境界をとつた人道詩人としての彼の面影がこゝにも表れてゐる。

『かしこ』と語る若者が

このソネットは、「一八三三年の夏の旅行中に作り又は暗示せられた詩」の一つである。三十年前（一八〇三年）詩人はバアンズの墓場を訪れて三篇の詩を作つた。この時（一八三三年）彼はモスヂイルを訪れた。彼の言葉を引用すれば、「モスギイルを、グラスゴオからキルマノックへの途中車上の若者が私に指し示してくれた」と。バアンズは一七八四年父に死なれて兄弟と共にエアシアに畑を求めた。これがモスヂイルである。バアンズが多くの優れた詩を作つたのもこゝであり、廿日鼠を鋤で引き起したり、野菊を倒したのも實にここであつた。

眠りに

彼は一八〇六年に『眠りに』と題する三篇の詩を作つた。それは『種々のソネット』の中に分類せられてゐる。これら三つの詩に就いてサラ・コウルリッヂは「非常に美しく特殊なものである。ミルトン的でも沙翁的でもペトラルカ的でもなく、又後代の如何なるソネット作者のそれにも似ないで、全くワアヅワス的のものであつて他の模倣を許さぬものである」と。

この詩は三篇の中で最も美しいものであり、最も賞讃に價するものである。ここでは花の[illegible]開く思想が、自然に容易に展開せられてゐる。先づ[illegible]に眠られぬ夜の熱病的な不安——繪の連續によつて讀者に印象せられた長く物憂い夜、それから曉と鳥の聲を待つて、やがて眠りを訴へる。非常にやさしい痛々しい場景である。

この詩の最初の部分は、スペンサアの『仙女王』に負うたものである。尙ほ、ドラモンドの詩、沙翁の『ヘンリイ四世』（第篇第三幕の一場）等を參照せよ。

畫家に

マアガレット・ギリイス孃はワアヅワス家の友人で、屢彼の家庭を訪れた。彼女は詩人の肖像を數枚描いた。最初印畫を作つたが、これが詩人に非常に氣に入つて、妻のも作つてくれるやうにと賴んで出來たのがこの肖像である。この詩に於て詩人が妻に對する愛情が年と共に益深くなつてゆく精神的な愛を語つてゐる。

同じ題で

初めギリイス孃の描いた愛妻の肖像に不滿であつた詩人は、妻に對する愛に於ても、若い時代の情熱的な感情から一歩進んで、一層精神的な愛に到達したことを悟つた。詩人がこの二篇の詩に就いて娘に宛てた手紙の中にも淑德あり謙讓な夫人に對する眞實の愛の流露がある。

羊飼は東を見て靜かにいつた

月はその美を雲と比較せられたのを憤慨してか、忽ち雲を破つてその姿を現はし、その美を證明した。やがて第二の雲が現はれて月を隱さうとすると、月は從容としてこれに應じて姿を隱した。月の光は美しい。時にはこれを現し示すが、隱れてゐても平然たるものである。すべて美しき者、偉大なるものは何れもこの通りであるといふ意。

グラアスミア湖畔にて

日は既に沈んで湖は鏡のごとく靜まり、湖面に映す星影は鮮やかに見える。これは空の水に映つたものか、或は水を通して下界の見えたもので、この下界にこれらの靜かな光體が宿つてゐるだらうかと疑つたのである。この世は修羅の巷で、不信に充ちてゐる。然し神の無限の愛は自然の中に現はれてゐる。湖には靜謐があり、空の星には無限の暗示がある。これを眺めるとき、われらの心は歡びに充ち、希望を生ずるのである。

一八〇七年八月、詩人はコレオルトンからグラアスミアへ歸つた。

アーノルドの "Quiet Work" を參照せよ。

愛らしい處女の姿を見た

『教會ソネット』の第二部「王政時代から現代まで」の一章。この詩は詩人がわが娘を夢見たままを描いたものである。

五月の朝

萬物はすべて調和の中に生活して平和を樂んでゐるに、ひとり人間のみは懷疑不安に充ちた生活を送つ

る。われらはよろしく自然物に倣ひ、現在の恩惠と未來の希望とを併せ感じて、潑剌たる歡喜を最後まで持續せよといふ意。

眞理は何處にあるや

苦難の多い人生の旅路では、絶えず懷疑に惱まされ、眞理は何處にあるや？　と問えることが多い。けれど花は躍り、雲雀は空高くなのり出でる。われらの靈も亦自由を渴望して天高く昇つて行かう。

この詩は一八四六年ローマで死んだ詩人の孫及び、兄のクリストファの病氣に際して作つたものである。

汝の誇つたのは

一八四四年、ウェストモアランド洲のケンダルより、詩人の閑居に近いウィンダミアの近くに鐵道を延長する計畫があつた。これを聞いて、七十四歳の高齡に達した彼は慨然として立つてその非を鳴らした。彼は文明を嫌ひ惡風の侵入を憂ひ、自然の神聖を說いた。萬人の偶像たる文明は、唯貪婪飽くことなき魔鬼であるから、神聖な自然をそれで汚してはならぬ。山は敵兵の文明の侵入を拒み、政治と思想の獨立を與へのである。これを措いて文明の利器たる鐵道のは、惡魔の通路を作るに等しいと。然し、守固陋の言をなすのではない。利益と害惡と、後に斷定を下せよと詩人はいふ。政治ソネット、

雜　篇

四季の思ひ

ライダル山での作。四季はとりぐにその美を現はすやうに、われらの一生もその四期を通じてその美を現し、人生の多なる臨終にも。また來る春を望むやうに、天國の希望を抱かうといふのである。三節と四節は連續してゐるもの。

女の兒に

詩人の註に、「この詩は、ライダル山の芝生で、私が屢見たやうに、この心象を見た時の卽興詩である。それは最初敎女のロサ・クィリナンのアルバムに書いたものであつた」と。

弦月と宵の明星

弦月と宵の明星と何れが主であるか從であるかと疑うた優美な四行詩。

激湍の岸に立ちて

人間の心は渦のごとく、その思想は泡のごとく湧き出るが、唯動搖するのみで、中心に落着かず、哀れな囚はれの身のごときものである。唯天の助けを求めるほか安心の道はないといふ詩人の信仰を現はした彼の最後の詩で、後四年にして詩人はこの世を去つた。

老人と駒鳥

孤獨の中に愛は尙われらを救ふことを老人と駒鳥の話を以て說いたもの。

勞働者の晝の讃歌

詩人の註に、「ケン僧正の朝夕の讃歌は一般に知れ亙つてゐる。同じ題目で書かれた讃歌も亦他に澤山ある。然し白日のための讃歌がないのでこれらの詩句を作つた。畑や森で日々勞働してゐる父母の許に、百姓屋の子供等が晝飯を籃に入れて運ぶのは、折々人の目擊する所であ

る。かゝる環境の下で、かゝる家族的合唱で、これらの讃歌の一部でも歌はれることを確めることが出來たらいかに私は嬉しいことだらう」と。

ワアヅワスはグラアスミアの教會で、村人に交つて禮拜することを好んだ。然し彼にとつては宗教は城壁や信條で束縛せられたものではなかつた。この深い確信を叙べたのがこの詩である。神は自然の神で、また勞働の神であるから、自然に包まれ、勞働に從事しつゝ拜すべきものである。田畑は聖殿、茅屋は祭壇、森林は會堂である。人手に作つた教會堂は必ずしも必要ではない。寧ろ自然の會堂で、土に親しみ、田畑を耕す間に、眞の感謝を以て神を拜することが出來るといふのである。眞に好個の農民の讃歌。

槲と金雀枝

ライダルからグラアスミアに到る山路で暗示されて作つたもの。

牧羊者アンドルウが自然を觀察して得た種々の教訓の一つを子供等に聞かせるのである。それはいふまでもない詩人自身が自然より學んだ教訓を示したもので、槲と金雀枝は强者と弱者との對照である。現在の天恩を感謝して、其日々々に滿足の生活を送らうといふ金雀枝の言葉は、また詩人の人生觀を語つてゐる。

マイケル

タウン・エンドで、一八〇〇年の十月と十二月の間に書かれ、『抒情詩集 第二版』(一八〇〇年としてあるも、實際は一八〇一年一月に公にされたもの)に附加した新作で、最も注意すべき叙事詩である。作者がこれを『牧歌』と呼んだのは、從來の傳統的田園派に挑戰し、もしくは永い間文學に於いて有毒な傳統となつてゐる牧羊者や田舍を取扱ふ誤つた態度に反抗し、一層自然な田園的情趣と一層純眞な田園的心理とを披瀝する眞の牧歌を示さうとした熱意からである。作者自から說明する通り、この物語は子供さへも喜ぶ作者の鄕里の爐邊物語の一つであつて、質朴粗野な物語ではあるが、「自然の純情を養はぬ少數の人々を歡ばすため」に彼はそれを語らうとし、煽情的な枝話によつて起す『荒々しい興奮』を伴はないで、感情を動かされる固い信念で物語つてゐる。彼は性格の根本的力、愛情、信仰、吾々の生活を支へ高める忍耐を示さうとしてゐる。

ワアヅワスの青年時代をよく知る人にとつては、彼が賤しい生活の詩人となつたことは自然なことゝ思はれる。地方の農夫としてかゝれたかゝる田舍人の生活は彼にとつては親しいものであつた。何故ならば、彼等の中に率直な威嚴、眞理への忠實さ、義務への獻身、純粹な親切さ、それに加ふるに、獨立と自由の精神とを有つてゐることを詩人は認めたからである。

この物語は最も單純なもので、短文に綴られるほどのものである。卽ち質朴な山地の牧羊者が八十四歲の時、赤貧のため一人息子を町へ送らねばならなかつた。その息子が都會で墮落してから後、幾年を山間で、沈默の淋しさの中に送つたといふのが一篇の主意である。然し彼が少年時代に聞いたこの話は詩人がそれを深い個人の愛情の象徵、人間の運命といふ世界苦の象徵と見るまで彼の心に殘つてゐたものである。この詩ほど彼の性格に合つた主題はない。當時このウェストモアランド地方の土地は次第に個人の所有權となつたゝめ、谷間に住む所謂States Manは先祖代々の土地に愛着をもち、これと離れることを避けるために幾多の犧牲を拂つた。この詩の主人公もこれら農人の典型で、人間の心を最も强く動かす二つの愛情たる、親の愛と土地の愛とに左右される惱みが描かれてゐる。

詩人がヂャスティス・コウルリッヂに語る所によれば、この詩は幾分事實に基いたもので「マイケルは放埒になつて、兩親の許を去つた老夫婦の息子に基いたものであり、寂しい谷間に羊の欄を作つて七年間を暮した老牧羊者の話に基いたものである」と。又この詩をかくのには友人トマス・プールをモデルにしたといふ。詩人が彼に與へた手紙によれば、「私は人間の心の最も力强い感情——親の愛と土地の愛(それには先祖代々から受けたものといふ感情と、家庭と個人並びに家族の獨立といふ感情を含めて)——に動かされてゐる心の强い生々した感覺性をもつた人間を描かうとした」といつてゐる。又チャールズ・ジェイムズ・フォックスに語る所によれば、『兄弟』と『マイケル』の二篇の詩は、「今では英國の北部に限られてゐるある種

の階級の間に存する家族的愛情を描かうとした」ものである、彼等は小さな獨立した土地の所有者で、彼等の僅かな土地で日々働いてゐるものである。そしてその「小さな地方は、家族的愛情を描いた札のやうに、家族的愛情の一種の集合點となり、それなくしては忘れる時にも種種の場合に思ひ出の種となる」ものであると。この詩の田舍風景は忘れてはならぬものである、

尙リュウクの性格と境遇は曾て詩人がタウン・エンドに住んでゐた家に屬する家族から得たものである。

詩體に於てもワアヅワスのあらゆる物語體の詩で最も完全なものである、これ程完全に思想に言葉を從屬させたものは彼の詩にはあるまい。主題も言葉も簡素である。こゝでは『詩句法』といふ技巧で、功果を高めようとする試みは見出されない。作者は嚴しい眞率さを以て物語を語つてゐるので、聖書の物語中の最も良い章句を想ひ起させる。終末の悲愴は沙翁の『リア王』の終の感傷に墮ちぬ悲愴に似てゐる。

ワアヅワスの悲劇詩の中で最も傑れたこの雄篇は、詩人を最もよく知るものゝ必ず讀まねばならぬもので、彼はこの詩によつてまた農民詩人として優秀な地位を占めてゐる。この一篇の農民詩によつても彼は現代に不朽の光を放つてゐる。

ペイタアはいふ「聖書の深さと嚴さといつたやうなものが、この異樣な、新しい、情熱的な、牧歌の世界に纏つてゐる。それは初め彼が心象を起し、その反映を近代の最もよい小說が彼から捉へてゐる」と。

テニスンの『イノック・アーデン』が海に緣の深い英國の漁夫の純情を歌つたものとすれば、この『マイケル』は山に親しんでゐる英國の牧羊者の至情を描いたもので、この相對比せられるべき二大雄篇は英詩の上に不朽の價値を占めるべき純情素朴な美しい物語詩である。

評　傳

1　ワアヅワスの生涯

「湖畔詩人」(lake poet) といふ誤つた名で傳へられたわがワアヅワスは、二十世紀に到つて初めて眞正の評價を下された。實際彼の人物と生涯に關する解釋は、彼が革命運動に參與した當時起つた慘ましい戀愛事件によつて、俄然として一生面を開いた觀がある。

從來他の詩人に比して、稍人間味の乏しい、道學者のやうに思はれてゐた彼は、若い人々によつて、殊に世紀末に於て彼が嫌はれたのは一面無理からぬことである。フランス革命に投じて危く一命を失はうとする所を遁れて英國へ着いた二十三歳の彼は、五十歳の人のやうに老けて寞れてゐたといふ。そして後年には國立教會に加はり、宗教上政治上極めて穩健な態度をとり、はては年金を受けて平和に幸福に長い生涯を送つたので、ブラウニングの如きは彼を變節者と筆誅したとさへいはれてゐる。彼が、『偉大な詩人はすべて教師である。余は教師として尊ばれるか、さもなくば何者にもなりたくない』といつてゐるのを見ると、「ライダル山のお上人さま」を想像しがちである。公平清明なテニスンの如きも、ワアヅワスを自分以上に聖者らしい生活をしたと信じ、『彼は一言も卑しいことを語らなかつた』と評してゐる位である。

かうした種類の見解を彼に對して懷かせたのは、一つは彼の傳記であらう。詩人の青年時代、殊にフランス滯在中のことは一つの謎になつてゐた。自叙傳體詩篇である『序曲』さへ彼は死後に初めて出版を許可した程である。ワアヅワスの傳記は數多く出てゐるが、その中で最も重要にして且つ初めて世に現はれたのは、詩人の甥に當るリンカンの僧正 (Bishop of Lincoln)の物したものである。ワアヅワスは彼に自分の傳記を書くことを託し、かやうな人によつて物されば、現在この世に生きてゐる人であると否とを問はず、個人の威嚴を傷けるやうな事柄が世間へ發表される恐れが全くないと考へたらしい。かやうにして一切の材料を託されたリンカンの僧正は、政治的宗教的に束縛された編者の立場から頗る意を用ひ、叔父の名譽を傷けると考へた材料を全部破棄し、主力を晩年の聖者的生活の大部分に捧げたのである。かうして出來たのが二千頁の大册であるが、フランス時代のことに關

しては僅かに八頁しか費してゐない。然しこの傳記はワアヅワスに對する世人の見解を決定的に確立した權威あるものと認められ、續いて出たナイト教授の傳記も大同小異のものである。かくして、ワアヅワスはその抹香臭い說教詩と相俟つて、生れ乍らの聖者と祭上げられてしまつた。かうして永い間彼はライダル山の聖人となりテイヌの所謂『薄明の詩人』となつてゐた。

然しワアヅワスの私生涯に就いて疑問を懷いてゐたためか、尊敬すべきワアヅワス傳（一八八〇年）を書いたマイアズ教授はそれとらしいことを仄めかしてゐた。また一八九七年にエドワアド・ダウデンも、ワアヅワスの平靜の中心には情熱があつたことを叙べてゐる。果せるかな、彼の謎は解かれ、聖者の正體は闡明せられた。それは一九一五年ハアバア教授によつてなされた新研究の賜物である。彼はソロボン大學のエミイル・レグイが一八九六年に公にした『ワアヅワスの青年時代』に刺戟されて、十年以前から彼の念頭に往來してゐた計畫を遂行したものである。彼の說く所は主としてフランス革命に對する詩人の狂熱的態度と行動と戀愛事件である。これによつて彼は、ワアヅワスが從來一般に認められて來たやうに枯木的道學者詩人でなく、反て人より優れた熱情家であつたことを立證し、從來のワアヅワス觀の誤まれるを指摘し、彼の作品の解釋上に前人未踏の新境地を開拓したものである。これによつて彼の詩には『ロマンスと情緒がない』といはれたことも誤謬であることが認められて、彼の作品の正しい解釋に到達することが出來たのである。

然しこれらの新研究に對する反動も起つた。オックスフォード大學のガロッド等の研究がそれである。然し彼の祕密が暴露されたとて、彼の人物の價値が減ずるものではない。又戀愛事件があつたからとて彼が偉いといふ譯もない。彼の特質は元來自由と熱情を愛するものであつた。そしてワアヅワスが詩人として最も油の乘つた時は、革命を經に、戀愛を緯に織り交ぜて、動搖の甚しかつた三十歳前後である。彼の優れた詩は何れもこの時代の作で、かの名篇『テインタン寺』を讀む人は、それが三十歳に達せぬ青年詩人の作であることは忘れがちであらう。彼の詩人的生命は四十五歳前後を以て終り、それ以

後は清新の元氣を失ふに至り、一八一五年以後のワアヅワスは詩人としては全く死んでゐるといつてもよい。かやうに考へるときは、彼の八十年の永い生涯の波瀾は三十歳前後につきてゐる。そこで、彼の青年時代を闡明し、それによつて彼の作品を新しく解釋することは、從來誤られたワアヅワスに一大光明を投げるものであると信ずる。これによつて從來、事件がなくて、極めて單調であると文學史家から異口同音にいはれた彼の生涯に、一つの光彩を與へることゝなつた。

ウィリアム・ワアヅワスは、一七七〇年（明和七年。ゴールドスミスの荒村行の出た年）四月七日、風光明媚な湖水に滿ちてゐる北英の農業地 Cumberland（カムバランド） は Derwent（ダーウヘント） 河畔の Cockermouth（コカアマス） といふ一小村に生れた。家は世々農を營んでゐた舊家で、父ジョン・ワアヅワスは、後の Lonsdale（ロンスデイル） 公、こと James Lowther（ジエイムス ラウザア） 卿の顧問辯護士兼土地管理人、母は Penrith（ペンリス） 町の商家の娘であつた。彼はジョンの二男と生れ、兄のリチャードとは二つ違ひ、妹の Dorathy（ドラシイ） とは一つ違ひ、其他に John（ジョン） と Christopher（クリストフア） といふ二人の弟があつた。五人の兄弟の中でも彼は際立つた腕白者で、「强情で、氣むづかしく、亂暴者」であつた。ある時などは惡戲をした爲に叱られて屋根裏へ閉ぢ込められた時、鈍刀を揮つて自殺しようとさへしたことがあるといふ。

八歳（一七七八年）の時、母が死んだ。そこでワアヅワス家は幼い子供の教育のために一先づ離散することゝなり、ウィリアムとリチャードとは Esthwaite（エスウヘイト） 湖近くの Hawshead（ホウス ヘッド） の學校に送られた。これから九年間（一七七八―八七年）のホークスヘッド校時代は、彼の傑作『序曲』に現はれてゐる通り、多くの愉快な記憶を殘してゐる。元來この町は近代的影響を受けぬ前世紀の遺風を存してゐる上に、湖水や丘陵に取圍まれた美しい土地であつたので、自然の感化は彼に大なる影響を與へた。それのみならず、彼の通つてゐる學校は（北イングランドで最も榮えた學校の一つ）であつて、生徒は寄宿舍に收れずに村の人家で世話になるといふ家庭教育の延長のやうな教育法を採用してゐた。殊に教師 Taylor（テイラア） は頗る卓越した教育家で、ワアヅワスに深い影響を與へ、彼の詩の中に出る Matthew（マシュウ） といふ人物は幾部分この教師をモデルにしたといふ。實にワアヅワスが自然愛に浸つてゐるのを最初に發見したのは恐らくテイラアであり、又彼の詩作を激勵した第一人者は確かにこのテイラアであつた。

かうしてホークスヘッド時代は全く自由に伸びてゆくことが出來た。湖沼で釣をしたり、スケイトをしたり、又寒い冬の夜は、泥炭をくべた爐邊で戸外の嵐の音を聞き乍ら色々と遊び戯れた。學校の休暇には、『ドン・キホーテ』、『ギル・ブラス』、『ガリヴァア旅行記』等を讀み耽つた。然し彼は書物は餘り讀まなかつた。それよりも唯一人思ひのまゝに山野を跋渉し、心ゆくまで自然に浸るのが好きであつた。

彼は此頃學校の課業として『夏休み』（The Summer Vacation）といふ題で詩を書いたが、これは彼の最初の詩作であつた。又學校の創立記念日に懸賞詩を書いて大いに賞讃せられたことがあつたが、それらは Pope（ポープ） の句法を眞似た幼稚なものであつた。然しこの頃から詩人たらうとする希望は胸に燃え、それと同時に自然に對する愛が次第に意識的になつてゆくのであつた。

ホークスヘッドの學校を終らぬ内に、ワアヅワスには一つの大きな轉機を示す時が來た。それは母の死後六年（一七八三年）にして、父がこの世を去つたことである。そこで五人の兄弟は孤兒となつたが、亡父の貸金があつたので、二人の叔父の世話で、一七八七年十月、ケムブリッヂの聖ジョウンズ・コリッヂに入學した。時に十八歳。然しこの學校は彼に好感を與へなかつた。何故なれば當時は十八世紀の末葉で、ケムブリッヂ大學は昔ながらの長夜の夢に結ぼれ、空氣は沈滯し、熱心さもなく、學究的精神も衰へてゐた。それに加へて學生はかなり享樂的であつた。フランス革命前であつた當時、如何に時代の空氣が沈滯してゐたかは想像するに餘りある。それと共に大陸から押し寄せて來る自由思想は、何時の間にか島國の青年の腦裡を支配して、同學府の學的基礎も危からしめる感があつた。

かやうに沈滯した學校の空氣は自然そのものゝやうにフレッシュな感情をもつてゐるこの若い詩人にとつては好ましいものではなかつた。徒に古風なアカデミックな講義も彼にとつては何の感興をも與へなかつた。かうしたドライな環境よりも、彼はカムバランドの風光を想ひ、純

朴な田園人を回想して懷しみを感ぜざるを得なかつた。彼はまた交友からも何等の影響を受けず、唯瞑想と讀書によつて內面生活を送つて來た。當時彼の多く讀んだのは Milton, Gray 等の英詩人であつた。

ケムブリッヂ時代に最も樂しかつたことは夏休であつた。彼は第一の夏休（一七八八年）をば、追慕の念に堪へぬ故鄕ホークスヘッドで送つた。次ぎの夏休みにはペンリスに行つて、四年目に妹のドラシイに逢ひ、又ドラシイの友人である Mary Hutchinson と逢つた。彼女はワアヅワスの幼年時代からの學友で、後に詩人の愛妻となつた。一七九〇年、第三回目の夏休みは論文を書くべき準備時代であるが、そんなことには一向頓着なく、登山家である友人 Robert Jones と共に大陸旅行を試みた。これはその當時としては全く破天荒のことであつた。この旅行中、當時まだ餘り噂にならなかつたアルプス山を登破した。歸途フランスの Calais に着いた時は七月十三日で、かのバスティーユ破獄の一週年の前日に當り、佛國民を擧げて熱狂の頂上にあつた。そしてこの年若い二人の青年は、到る處で歡迎を受けた。この旅行は彼にとつては樂しさの限りであつて、無限の希望と感慨とを懷いて歸つた。『描寫小詩』 Descriptive Sketches はこの時の記念詩である。

翌一七九一年、彼の卒業期は近づいた。彼は卒業試驗には Richarson を讀んでゐたといふ。B・A・の學位をふと同時に學究生活と訣別する決心を示した。かやうして學課に專心するといふこともなく、從つてこれといふ優れた學才を現すこともなくて學校を卒へた。

卒業後、親戚達は彼を牧師にしようとしたが、彼は會に對しては好感をもつてゐなかつた。又法律家か軍人にならうかとも考へて見たが、結局それらの考へも捨て何の目的もなしに倫敦へ出た。そして諸所方々を見したり芝居を見たりして數ケ月を過した。『貧しきスザンの幻想』、『ウェストミンスタア橋上にて』等の絕唱はこの時の作である。その內、その當時の多くの青年とじく、フランス革命に興味を感じ、秋になつてフランへ渡り、先づパリに足を停めた。當時フランスは

『嵐に搖られて、碇泊してゐる

船のやうに動く革命の力を見た。』

のであつて、さなきだに年少氣鋭の感情詩人は、諸所の集會に出席しては自由平等の聲に激せられ、殆ど詩を忘れ、自然を忘れ、フランスのために身を捧げることさへした。バスティーユ城跡を訪れて遺物を拾つたのもこの頃であつた。

一七九一年十二月の始めオルレアンに來てから間もなく Blois に行つた。こゝで哲學者にして詩人である革命黨の首領 Michel Beaupuy と親密になり、彼から共和黨員の抱負とその意義使命等に就いて種々聞かされるに至つて、彼は革命運動の眞諦を知つたものゝ如く、一七九二年七月にはオルレアンに歸つたが、愛國的狂熱に驅られて十月にはパリへ歸つた。時は恰も「九月虐殺」の一月後のことで、頻々として行はれてゐる國民大會その他の集會に列席しては大いに氣勢を擧げ、一時は、Gironde 黨の首領とならうとさへ考へた。かくして彼の身が一歩々々ギロティンに近づいてゐる時、友人は彼に共和黨に參加することを中止させ、ワアヅワス家の人々も驚いて彼に送金を斷ち、彼は不面目ながらも自から歸國しなくてはならなくなつた。彼は後年この歸國を追想し

く神の

たな

所で

えて

ーとは興味ある事實である。

この掃話と共に、彼がフランス滯在中の事件として、異常の興味と驚異とを惹起した事實は、近時發見せられた新しい史實として注目せられてゐる戀愛事件であつた。初めワアヅワスがオルレアンに着いた時は誰も知合がなく、月八十フランといふ安下宿生活をしてゐたが、その頃間借の部屋を見に行つたのが緣となつて、Marie Anne Vallon といふ女の滯在してゐた彼女の親戚の家と知己になり、終に彼女と戀に陷つた。彼女は一七六六年六月二十日ブルワに生れ、ワアヅワスよりは四つ年上の廿六歳であつた。彼女の父は外科醫で、祖先はスコットランドの產である。アンが詩人を知つた頃は彼女の父は既に數年前に死去し、母は他へ再婚して、直接アンの監督をする者は一人もなかつた。かうした周圍の事情の下に二人の戀

は先づオルレアンに始まり、更にブルワで繼續せられた。アンは間もなく身重となつた。そこで人目を偲んでオルレアンに移り、詩人も亦その後を追つてそこに暫く住んでゐたが、後パリへ歸つた。愛兒の出産を聞いたのはパリ滯在中で、その子は一七九二年十二月十五日 Saint Croix 寺で「英人 William Wordsworth, Marie Anne Vallon との娘 Anne Caroline Wordsworth」として洗禮を授けられた。

十二月の末歸英して叔父にも相談したらしいが二人の結婚は旨く成功しなかつた。一方アンの方でも親達の反對以外に政治上宗教上の相異が旨く行かなかつた。アンはフランスの王黨に屬し、同時にカトリック教徒の娘であつたので、二十二歳の一外國人の一貧書生、しかも革命の熱心な主張者であり、又新教徒であるワアヅワスとの結婚は親から見れば餘程危險なものであつた。のみならず當時は勤王黨と革命を主張する人との間の結婚は許されなかつた。このため彼はアンと離れねばならなかつた。然しブルワに追はれたのも彼の親戚に追はれたのであつて、實は彼女と共にゐたかつたであらうといふハアバア教授の言は事實であらう。實際性道德の緩い十八世紀末に特に不自然な動搖のあつたフランスで、この若い詩が氣輕にその戀を捨てる筈もないが、兎も角、この二人の若芽は摘んでしまはれた。

この間の消息を早く知つて色々と盡力したのは妹のラシイであつた。彼女は兄の味方となり、アンとその子に滿腔の同情を寄せ、進んでアンに手紙を書いた。アンも亦詩人とその妹へ交互に、又或時は二人で同時に手紙を書き、一面にワアヅワスが早く來てくれることを切願すると共に、他面には此時英佛兩國間に宣戰が布告されてゐたので、夫の身邊を憂ひ、心は悶々の情を述べた手紙を書いたことがあつた。その最も代表的のものは一七九三年三月廿日附の手紙で、戰爭のためフランス官憲に押へられたのが近時ブルワの公記錄保存役場から發見された。彼もアンに對する文通を怠らず、更に十年間絶ずフランスにゐる母子扶養のために自分の收入に不相應な送金を實行してゐた。

其後二人の關係はどうなつたかといふと、アンの Paul Vallon は間もなくオルレアンに起つた Bourdon 事件（革命黨のブウルドンをオルレアンの勤王黨が迫害し

といふ事件）に連坐して危く一命を失はうとしたので、アンは暫らくワアヅワスや愛兒のことも忘れて兄の身の上を心配し、終に王黨の有力な同情者となつて反革命黨たる Choman 黨のために一身を睹して加勢し、時の政府から "Veuve Williams a Blois"（ブルワの寡婦ウィリアムズ）といふ名で睨まれ、危く捕縛を免れたのである。英佛兩國間の講和條約が結ばれ、一八〇一年の末から一八〇二年の春にかけ、二人の間に再び文通が始まつた。然しこの十年近くの間に二人の關係は內外の事情からして餘程變つて終に結婚を全く斷念したやうである。その後ワアヅワスがメリと結婚する時にも、彼女に對してアンとの過去の關係を打ち明け、又アンに對してはメリとの結婚を知らせてその了解を得るために、兩國の平和が克復するや、妹と共にフランスへ渡り、一八〇二年八月一日にはカレイに着き、アン母子と久し振りで對面した。『美しい夕べ』といふ美しいソネットに現はれる子供のことは從來ドラシイであると考へられてゐたが、實はカロリンのことである。ワアヅワスとアンとは互ひに正直に自己の立場を告白して到底結婚の成立し難いことを悟り、潔く別れることになつたが、然し將來は友人として愛情を持續しようと約束した。それから八ヶ月目に又もや英佛兩國間に戰爭が起つて二人の文通は絶たれてしまつた。

その後一八一四年四月ナポレオンがエルバ島へ流され、英佛の間に和議が成立するや否や、ワアヅワスとアンの間に再びドラシイを通じて文通が始まつた。この時既に廿一歳になつてゐたカロリンは Baudouin 大尉と婚約が成立してゐたので、アンからワアヅワス兄妹の渡佛を勸めて來た。そしてせめてドラシイでも結婚式に立合つてくれとの母子の賴みでその約束が出來てゐたが、折しもナポレオンがエルバから脫出して再びパリへ歸ると共にこのことは水泡に歸した。やがて王政復古の世となつたので、一八一六年二月廿八日カロリンとボウドウンとの結婚式が行はれた。結婚の登記には、『Westmoreland 公領、Grasner Kedan に住む Proprietaire（地主）William Wordsworth fille majeure（十年の娘）』と記されてある。一八二〇年十月詩人夫妻と妹は延期してあつたパリ訪問をすることになつて、昔の戀人同志が約二十年目近くで再會した。所はルーヴル博物館で、ワアヅワス夫人とア

ンはこゝで始めて會見した。ドラシイの手紙によつても萬事圓滿に行つた樣子である。

ワアヅワスはこの戀愛事件に就いては一言も語つてゐないので不明であるが、『ヴァンドゥラクールとジュウリア』(Vandracour and Julia)と題する詩がこの事件を取扱つたものであらうといはれてゐる。この詩に就いては詩人自身も實際にあつた事であるといつてゐる。その主題は二人の戀人が結婚しようと思ふのだが親達が同意してくれぬ。併し兩人は同棲するので親達は益々兩人を離さうとするといふのである。その戀は仲々熱烈であつて、實際の經驗なくしては書けぬと思ふ所が明かに見える。

アンとの關係はワアヅワスの半生に深い影響を與へた。彼女に對する同情、自己の過失に對する悔恨は絶えず彼の心を惱ました。其頃書いた『廢れた小舍』(The Ruined Cottage)、『茨』(Thorne)、『ルース』(Ruth)、『マアガレットの惱み』(The Affliction of Margaret)、『見棄てられた者』(The Forsaken)、『罪と悲み』(Guilt and Sorrow)は男に見棄てられて、その忘れ片見を抱いて歎き悲む母の心事を描いたもので、詩人が如何にこの事件に惱んだかを想像するに餘りがある。

アンとの戀愛事件に次いで一言して置きたいことは、彼女に對する愛が次第に變化するに連れて、ワアヅワスの心が彼の鄕土と田園生活と自然靈的感化といふことに深く透入するに連れて、彼の心に甦つて來たのは Lyrical poems と題して書いてゐる五篇の詩の主人公ルウシイである。說明好きの彼に似合はず、このことに關しては何の說明もしてゐないが、大體現實の人物であることは決定されてゐる。この謎の乙女が單に架空的の人物でなとすれば、それは詩人の初戀の女ではあるまいか。片田舍の谷間に美しく咲出で、自然の手に親しく育てられ、やして間もなく詩人の若い胸に痛恨を殘してあの世へ去つて行つた純な乙女であつた彼女こそ、詩人の妻にはふさはしい女と思はれたであらう。兎も角、ワアヅワスには戀愛詩がないといはれるが、これらの詩は假令數は少くとも、彼の詩集中に優婉な戀愛詩として輝いてゐるのである。

是より先、一七九二年十二月の末ワアヅワスはフランスから歸英した。フランス革命の結果は彼の期待を裏切り漸く失望を感じ、フランスに對する同情は戰爭と共に冷かになつた。彼は一方物質的にも困難し、一定の職もなく不安の日を送つてゐたが、この時彼を慰め、その天分を開發するに與つて力あつたのはドラシイであつた。かくして自己の天職を自覺した彼は先づ詩の舊稿を整理して、大學の夏休中に書いた『夕の散步』(Evening Walk)と『描寫小詩』との二册の詩集を刊行することになつた。無論豫期した通り彼の名聲を博する料にはならなかつたが、唯 Coleridge の注意を惹いたことが後にこの二人が友人となる原因となつた。

然し茲に一つの幸運が與へられた。それは彼を甚く崇拜してゐた友人 Raisley Calvert(『レイズリイ・カルヴァートの思ひ出に』を參照)が一七九五年の春臨終に際して、詩人の天職を全うするやうにといつて九百磅を殘してくれた。そこで彼はその生涯を詩作に捧げ得る機運と決心とを得るに至つた。二十五歲の詩人は愛妹と共に一七九五年の秋、Dorsetshire の Racedown に一軒を構へ、豫て望んでゐた「簡素な生活と高尙な思索」Simple Life and high thinking を實行することが出來た。この地には二年足らず住んだが、この時作つたものは『罪と悲み』、『國境』といふ悲劇一篇と、『廢れた小舍』である。

今一つ重大なことは、コウルリッヂとの交友の始まつたことである。一七九五年六月コウルリッヂはこの閑居を訪ねて來た。その時『廢れた小舍』の原稿を見て、英語文學の中でこれを比肩するものはないとさへ激賞した。これより彼は終身ワアヅワスと交友を結び、ワアヅワス兄妹も亦彼を不思議な人として慕ひ、コウルリッヂが一七九五年十月結婚して Bristol に近い Crewcodon に居を定め、Nether Stowey に移つたが、ワアヅワスも一七九七年になつて近くの Alfoxden へ移つてから、兩詩人の友情は益々濃厚になつた。ワアヅワスは此頃より自然に對する信仰を洩し、コウルリッヂは早くから、優婉豐美の情想に耽つた。一は哲學的瞑想的詩人であり、一は直感と空想の詩人で、各自の特徵を以て互に相補ひ、激勵し合つた。かやうにして二人の共同事業として生れたのがかの有名な『抒情詩集』(Lyrical Ballad)である。

一七九八年九月、この『抒情詩集』が公にせられたこ

とは、ワアヅワスの生涯に於て特筆大書すべき事件であつたことは勿論のこと、實に英文學史上エポック・メイキングな作であつた。この詩集にはワアヅワスが十九篇、コウルリッヂが四篇收めてある。その中『老水夫の唄』(The Rime of The Ancient Mariner) の如きはコウルリッヂ畢生の傑作で、優に一卷の光彩である。けれどもこの詩集はワアヅワスの詩集といつてよい位に彼の詩風をよく代表するもので、『決心と獨立』、『局面一變』、『ティンタン寺』等の傑作を收めてある。その詞句の上に於ては十八世紀のポープ等以後用ひ來つた誇張粉飾の不自然な句法を打破して、日常の平易な語を使用し、その題材の上に於ても田園の卑近な生活から取り、更に自然の靈性を歌はうとした。かく英國詩壇の一新紀元を劃さうと烽火を揚げた試みも、當時の詩壇は是を卑淺として甚だしく攻擊した。實際中には『白痴の子』(The Idiot Boy)『茨』The Thorn『グッディ・ブレイクとハリ・ギル (Goody Blake and Harry Gill) 等の如きは、餘りに取材が平凡で、その語句の雅氣を帶びてゐる點等は、非難と嘲笑を受けるのも一面には理由があつた。これがため一八〇〇年に出した第二版の詩集には、長篇の序文を寄せ、自作を辯明する共に時の文壇を痛罵した。これがため益々世の反抗をいた程であつたが、今日より見るときはそれは實に新代の詩風の魁であつて、その序文は實に英國ロマンティズムの提唱であつた。兎も角英國のロマン派運動が文上の一形式として眞實な立場を取るやうになつたのは、實にこの『抒情詩集』が上梓せられてからである。

『抒情詩集』出版後間もなく(一七九八年九月十四日)アヅワスは妹とコウルリッヂと共に大陸旅行に向つた。(ハムブルグ)づ Hamburg に行つて數日間滯在し、詩人 Klopstock(クラプシュトック)面會した。詩人兄妹はそこからコウルリッヂと訣れてルツの森の近くにあるロマンティックな帝都 Goslar(ゴスラ)にいた。然しこの滯在は色々の意味で不愉快なものであた。第一こゝは恐ろしく寒い氣候の地であつた。それに囊中も全く豐かでない。それに彼は聊か排斥せられたきがある。この悶々の情を遣るべく彼は毎日近くの城に登つたり、魚狗(かはせみ)を追つたりして遊んだ。かうした環にある旅の宿では自からノスタルヂアに惱まされ、過去

の追憶に耽つたことであらう。その結果出來たのが『ルウシイの詩』である。その他『ルウシイ・グレイ』、『ルース』『詩人の碑銘』等もこの時の作である。ワアヅワスは獨逸文學の影響はコウルリッヂほどではなくて終り、一七九九年四月、英國へ歸つた。

其後暫く湖水地方を遊歷する內に、秋になつてウェストモアランドの Grasmere(グラアスミア) のタウンエンドに一つの空家を見出し、十二月二十日に引越した。これが有名な『鳩の家』(Dove Cottage)である。

『曾てグラアスミアの谷の人々に
美酒を振舞ふ「鳩と橡欖の枝」のあつた所
……
曾ては「鳩と橡欖の枝」の札の懸つてゐた所が
今は單純な水飲詩人の隱れ家』

と、『馬車引き』(The Waggoner) の中で歌つてゐるこの家は、初めは「鳩と橡欖の枝」といつた田舍宿であつたのを、詩人が來てから『鳩の家』と名づけたのである。この家程詩人の心に適つたものはなかつたやうで、彼の傑作の大部分はこゝで書かれたものである。今やこの家は英國國有財產の一つとなり、ワアヅワス博物館として詩の巡禮者達の胸を躍らせてゐる。

『鳩の家』に移つてから間もなく『抒情詩集』の第二版が出た。それと同時に『マイケル』、『兄弟』等の新しい詩を加へて二册にして出した。然し彼の名聲は擧らず、彼の生活は依然として貧乏であつた。所が此時曾て亡父がロンズディル公に用立てゝゐた金が、相續者から支拂はれることになつた。そこで三年の後(一八〇二年十月)、馬の友であつたメリ・ハッチンスンと結婚[illegible]は三十二歲。彼女は卓越した[illegible]たが、その性質が柔和で、[illegible]つ善良な女であつた。それは『彼女は歡ばしい幻』といふ詩で彼女を讃へてゐるのでも分る。この結婚が圓滿幸福であつて、彼の詩人としての天職を全うせしめたことは彼が晩年妻を歌つた二つのソネット(『畫家に』と、『同じ題に』)によつても明かである。

翌年[illegible]は長子ジョンが生れ、それから間もなく妹と共にス[illegible]ンドの旅行に登つた。この旅行中の作は『ひと[illegible]る乙女』、『訪れぬヤロオ』、『ハイ[illegible]

の乙女に』、『バアンズの墓場にて』、『西方へ歩む』等の傑作が少くない。この旅行中スコットと初めて會見した。九月歸英した。

一八〇四年は娘の Dora（ドラ）（ドラシイの通稱をとつたもの）が生れたが、翌一八〇五年には弟ジョンが死んでこの平和な詩人の生涯を襲うた。彼は船長であつたが難船のために船と運命を共にした。『悲歌』(Elegiac Stanza)はこの死を弔つたものである。その年にはトラファルラガルでネルソンが死んだ。詩人はジョンとネルソンとの間に横はる一脈の精神を見出して『幸福な武士』なる莊重な詩を作つた。

尙この時代の作として著名なものに『序曲』を擧げねばならぬ。この詩はゴスラ滯在中に腹案が出來たもので一八〇〇年に第一卷第二卷を終り、一時中止して一八〇四年に第三卷から第十一卷までを書きあげ、一八〇五年に至つて完成したものである。尙此外一八〇二年には『逍遙篇』の第一卷第二卷の大部分が出來上つてゐる。又有名な『永生の頌』もこの時代に完成された所を見ると、「鳩の家」七年間は詩人の圓熟時代であつた。

『鳩の家』に於ける樂しい家庭生活も、家庭に次第に狹隘を感じ、終に九年の友であつた De quincey（ドクインシイ）を讓り、一八〇八年グラアスミアの Allan Bank（アランバンク）に移り、更に牧師館に移つた。この十年の間に彼は五人の子供の父となつたが、こゝに來てから一男一女を失ひ、その思ひ出に堪へないので、こゝから程遠からぬ Ambleside（アムブルサイド）附近の Rydal Mount（ライダルマウント）の丘を購入し、一八一三年、詩人が四十四歳の春こゝへ移つた。この地はワアヅワスの安住の地であつて、彼の名と結びつけられてゐる。その地に於ける三十有七年間の生活は、詩人が殆どその天職を全うし、その端肅な人格と儉素な生活は、次第に世の稱讃と尊敬とを增しつゝ靜かに過去の功績に對する報酬を受けた時代であつた。この附近には所謂湖水派(Lake School)と稱するサウジイ、コウルリッヂ等の詩人が住んでゐて、自然の他に知己交友は少くなかつたが、エマスンの如き人すら、遙々この地に彼を訪ねた程である。

この頃から彼の詩才もその芳醇さを次第に失ひ、次第にその力が衰へて來た感がある。『レイオダマイア』はこの轉機に臨まうとする彼の傑作である。

引越した年、英政府からウェストモアランドに對する印紙專賣者に任命せられた。ダ・クインシイはこれを以てワアヅワスの全生涯に著しい好結果を齎した天祐の一例であるといつてゐる。

一八一四年七月、妻の妹 Sara（サラ） Hutchinson（ハチンスン） を伴ひ、二度目のスコットランド旅行を試みた。この時豫ての希望通りヤロオを訪れて『ヤロオを訪れて』の名篇を得た。この年『逍遙篇』が上梓された。愛すべき大作であるが、依然として世評は惡く、第一版の五百部が六年間も店頭にあつたといふ有樣である。然しこれがため彼は自己の天分を疑ふことはなかつた。

この頃からワアヅワスの考へも次第に保守的となり、カトリック解放運動に反對し、すべての民主的運動に反感を懷くやうになつた。そして「社會的理解（ソシアルグラスム）」の減少と共に彼の詩的光彩は益々消え行き、かの『比類稀なる光輝美の夕べに作る』はこの天才の最後の美を象徵するかのやうに、彼は再び昔日の詩美に達することを得なかつたようである。

一八二〇年の秋、妻と妹と共に大陸に渡り、昔の戀人に久し振りで逢つたことは既に述べた通りである。ライン、スウィス、イタリー等の旅行に四ケ月を費し、その印象を『大陸旅行記念』(Memorials of a Tour on the Continent)として出版した。

ワアヅワスの生涯、殊に晩年は殆ど席溫まるの暇のない程旅行を試みた。一八三一年には三度目のスコットランド旅行を試み、スコットの臨終の床に最後の會見をする機を得た。

一八三四年には、親友コウルリッヂがこの世を去つた。その他知人等に死する者が多くて彼の悲しみは深くなつた。加ふるにその想像力も衰へ、唯僅かに幾つかのソネットによつて壯年時代の活力を示すにすぎなかつたが、しかし長い間俗衆の振向かなかつた彼の詩も、彼が六十歳の春を迎へた頃から次第にその價値を認められ、前には痛罵の急先鋒であつた『エディンバラ評論』(The Edinburgh Review)の批評家 Jeffrey（ヂエフリー） の如きも、一八四四年、終にワアヅワスの新詩風の勝利を認むるに至つた。かくして今

や彼を知らざれば紳士の體面に關すとまで言はれるに至つた。

かくて一八三九年の夏オックスフォード大學はD・C・Lの學位を彼に贈り、一八四二年に政治上文學上の貢獻に對して三百磅の年金を贈ることゝなり、更に一八四三年サウジイが逝去すると間もなく、その後を受けて欽定詩人に列せられることになつた。詩人は老齢その職に堪へずといふ理由で辭退したが、女皇の優渥な沙汰に接し遂に之を拜受し、ヴィクトリア女皇に謁を賜つたのは一八四五年であつた。これから詩人の榮譽はその頂上に達し、今迄埋沒されてゐた彼の詩集は尊敬の念を以て讀まれるに至り、苦節三十年の彼は初めてこゝで酬いられるに至つた。欽定詩人となつてからは何等の詩作を發表しなかつたが、一八四四年ケンダル及びウェストモアランド鐵道敷設に對する抗議書は、彼の晩年を飾る立派な社會的貢獻であつた。

ドラシイもこの頃は健康が衰へてゐた。加ふるに彼の愛娘ドラは結婚後一八四七年に病死したので、詩人は同復すべからざる衝動を受けた。一八五〇年三月十二日、彼は夕日を眺め乍ら石に腰をかけてゐた時、風を引いたのが因となつて、終に四月二十三日(沙翁逝去したと同月日)、愛玩の郭公時計が十二時を報ずる音を聞きつゝ遠の眠りに就いたのであつた。享年八十歳。遺骸はウストミンスタア寺の顯榮を避けて、この平民詩人に相應しく、グラアスミアの質素な墓地に葬られてゐる。彼はRothay河のほとり、彼の生涯の如く靜かなグラアスミアの寺院の綠なす境内に、愛するドラの傍に眠つてゐる。『地上如何なる地と雖もワアヅワスが墓地より聖さはいであらう』とはBrookの言葉である。

II　ワアヅワスの性格と人物

ワアヅワスの性格の中で最も著しい特徴は嚴格と感性との結びついてゐる事である。彼は元來多感多情な想家であつた。一見冷靜枯淡は見えるやうなのも、實彼の感激を絶えず抑壓し、冷靜にと努めたからであらう。自然に對して「賢い受身」(Wise passiveness)であれとふのも、彼が外界の影響に動かされ易い多感の人間であることの證左となりはすまいか。又神經質で氣むづか

幼年時代から一八〇六年に至る彼が詩的發展の歴史である。全篇十四卷、九千行の詩句からなるこの詩はそれ自身一箇の完成した長篇であるが、元來は退隱生活を營む一詩人の感情や意見を主題として「自然、人間、社會」に就いて一大長篇の序樂曲として書き出されたものである。そこには自然愛の發達と革命が彼に及ぼした影響等を描いてゐる。冗漫で懶い感じもするが、自叙詩の興味と、彼の作品の研究の序論として缺くべからざるもので、十九世紀に於ける長詩の第一に位する傑作たるを失はぬ。

『序曲』といふ小禮拜堂に次いで、大加藍ともいふべきもの丶第一部は唯一卷しか書かれなかつた。それは一八八八年まで草稿のまゝで殘つてゐた『隱遁者』(The Recluse)である。これはグラアスミアの谷への移住を物語るものであり、又「目前に仕事の限りなき夢を見、淸貧な併し日々破れることなき歡びに生きる靑年の情熱と熱心」とを語つてゐる。第二部が九卷、一萬一千行からなつてゐる『逍遥篇』(The Excursion)である。この詩は信心深いスコットランドの一行商と三日間に亙つてカムバランドの谷を逍遥した話を筋としたもので、『序曲』よりも更に長く、全體として見る時、釣合を缺ぎ、抒情叙景より教訓說教に傾き、當時の批評家ヂェッフリイも『獸作である』と嘲り、バイロンも『眠たく煙たき、厭はしい詩』であると罵つた。これは社會の諸問題に關する詩人の思想を研究するには甚だ貴重な材料であるが、詩の價値としては『序曲』に及ばないかもしれぬ。然し巖の諸々に鏤めた寶石のやうに、局部に於ては最高の域に達してゐる詩美を發見せられる。ワアヅワスを餘り讃嘆しなかつたテイヌさへも、「新教の寺院のやうなもので、變化も裝飾もないが尊嚴なもの」であると讃嘆してゐる。

以上の三大詩はワアヅワスが詩人として又思索家としての面目の最も明かに示したもので、ワアヅワスの研究者の決して忘却することの出來ない作品で、他の多數の短詩は恐らく恰もこれらの附屬物とさへ思はれる程である。

この他『ピイタア・ベル』(Peter Bell)は墮落の底に沈んだ飲んだくれのPotterが、水に溺れんとして彼が救つた驢馬Assに救はれ、偶然に僧侶の說教を立聞き

悟する物語である。またノートン一家の悲運を語つた『ライルストンの白牝鹿』(The White Doe of Rylstone)、又彼の唯一の劇でありながら失敗に終つた『邊境』(The Borders) 等の長篇もあるが、最好の話は却てその短篇の中に多い。即ち抒情的詩篇の中には『虹』、『雛菊に』、『ひとり麥刈る乙女』、『忠告と返答』、『態度一變』、『詩人の碑銘』、『巖の櫻草』、『バアンズの墓場にて』等の逸品があり民謠體では『私等は七人』、『ルウシイ・グレイ』、『アリス、フェル』、『手飼の仔羊』等は人口に膾炙してゐる。說話體の詩には、高傑普遍の感情を描いて人の肺腑をつく『兄弟』、『ルース』、『マアガレットの憂み』、『鹿飛ぶ泉』、『水蛭取る人』、『マイケル』等の名篇がある。頌歌の中には、『永生の頌』の如き十九世紀の最高調の詩であるのみならず、實に英國頌歌中の白眉がある。その他『義務の頌』『比類稀なる光耀美の夕べに作る』等何れも傑作とすべきものである。其他瞑想的省察的の詩には『テインタン寺』『幸福なる武士』等の名篇がある。更に十四行詩に至つては、シイクスピア、ミルトン以來の英詩中に珠玉を殘し後はロゼッティに接する名什に充ちてゐる。十四行詩は十八世紀以來忘れられてゐたのを彼がアヅワスをして九鼎大兄よりも重からしめ、『ミルトンに』、『ウェストミンスタア橋上に』、行詩を侮るな等は詩人の作での絕唱であるのみ英詩中の白眉である。又『國民の自由と獨立とに十四行詩』と題した數篇の政治的十四行詩は、當治に對する英文學の最も尊い貢獻であつた。

彼の詩が如何に優れたものであるかは、パルグレイヴ(Palgrave)がテニスンの助力を得て、三十餘年を費して集めた名英詩選 "Golden Treasury" に收めてある三百二篇(版によつて多少の增減がある)のうち、ワアヅワスの詩が四十四篇あることによつても知られるであらう。

最後に彼の使用した韻律に就いて一言しよう。擬古派の使用した韻律は、十の九まではヒィローイック體の二行節と定まつてゐたが、彼は諸種の形式をば縱橫に使用した。彼の最も好んで用ひたものはアイアムビックで、就中無韻詩である。『逍遙篇』の如きもそれである。又アイアムビック四脚の五行格、六行格等もよく用ゐてゐる。又チョーサーの使用したものと類似した五脚の七行格も自由に驅使してゐる。約束の多い十四行詩に巧妙であつたことは前述の通りである。

彼はミルトンと同じやうに、崇高く意味深い散文體の名手であつた。彼の散文的作物は彼の詩を說示するものとして又重要なものであることを附言しておく。

IV ワアヅワスの詩の特徵

人間としてのワアヅワスの性格からして、彼の詩作が如何なる特色をもつてゐるかを考へて見よう。

彼の詩を考察する場合に第一に考へられることは、彼の詩が非常に不同な價値をもつてゐることである。それは詩の散文主義を唱へた彼の主張が累して、平凡にして散文的なものが混淆し、傑作と拙作と雜然として、時に極端に走りすぎて讀者をして懶い感じを與へるものがある。これがため彼の詩を讀むには適當な選集が必要であることはペイタアもハアンも指摘してゐる。アーノルドの選集が好評を博するのも一面にはこれがためである。

彼は詩人の天職を自覺する餘りに、詩を以て社會を敎化するものと考へ、『大なる詩人はすべて敎師である。そこで余は敎師として尊ばれなければ、寧ろ何者とも思れたくない』と。かく詩人の天職と道德家の天職とを同したために、彼の詩は屢々敎訓的となつて退屈な感與へるものが少くない。然し彼の敎訓は單なる形式でいことを忘れてはならぬ。

眞面目さと心の確かさも彼の詩を特色づけてゐる。の詩は彼自身の反映である。誠實と正氣を基調としたの詩には、病的な、感傷的な、官能的なところはない從つて戀愛詩が少ない、殊に濃厚な戀愛詩は少ない。た慘らしい悲劇を取扱つたものも少ない。これらは彼生ひ立ちからも、平和な家庭からも、主義からも、性からもそれを許さなかつたのである。

更にユーマアに至つては全く缺如してゐて、彼は普なものと嘲笑すべきものとの一歩の距離さへ見失ふほである。また戲曲的才能も說話的技倆も少ない。唯一しかない悲劇が成功しなかつたのもそれがためであまた人情の波瀾、一般社會の利害得失等、人生の多方面經驗事件に對しても深大な同情を懷いたともいはれこれが、彼の詩のポピュラーにならなかつた所以さあ

然しこれらの缺點から轉じて、彼の詩の價値を見るならば、先づ第一に形體の清純さと單純さとに於て卓越さを示してゐる。『ひとり麥刈る乙女』等の詩はその最も代表的なものである。彼の詩が餘り單純なため、人の鑑賞を妨げることがある。『ルウシイ』の如き詩に至つては、飾りのない美のために我々の注意を見逃すものもある。彼が久しく一般讀者から認められなかつたのもこれがためである。詩から奇想を解放しようとした彼は單純な眞實の言葉で語り、自然と人間を如實に描いた。それがために最も單純な詩句の中に隱れてゐる情熱や强度さも見失ふほどである。尙彼の力ある單純味はウィリアム・ブレイクの傳統である。

次ぎに彼の本質的特色は、飾りはないが生きた自然さをもつてゐる。『水蛭取る人』を見ても實に禿山の如く飾りがない。然し精密な觀察者であつた彼は生ける自然を描き、無飾の所にも壯大さを示してゐる。彼の詩は永遠に新鮮な淸水のやうな詩である。

鋭感な感受性の持主である彼は、感覺の執拗な把持性をその詩に示してゐる。その强烈さには必然さと神祕さを伴つてゐる。この神祕的な雰圍氣は彼の詩の全體に現はれてゐるものである。

ワアヅワスの有する最も大なる天賦の才能は詩句法でもなく生の哲學でもなく、その高い想像力と稀有な表現力との結合である。これが評價し難い實を以て英詩を豐富にした。彼の想像的雰圍氣はシェリイやキイツよりも甚だ異つてゐる。然し彼等に劣らず眞實である。彼の象喩の力と眞實も著しい特徴となつてゐる。

次ぎにワアヅワスの描寫の特質を述べると、彼はその强烈な感受性によつて、ある光景の統一ある印象を把へ得たことである。個々のディテイルズに囚はれて全體の效果を初めるやうなことは決してない。彼の印象が永續するのは、常に物象の內的美に觸れてゐるからである。

彼は光と明暗に就いて多くを語つてゐるが、色彩の說明は極めて稀である。これは彼の感受性が餘りに强かつたために、すべての色彩が一種の光と感ぜられたのであらう。その代り、彼は音に對しては微妙な感覺を具へてゐる。かの『郭公に』の如きは全篇が音を說明した詩である。彼の韻律はその叙景と同じく全體として一種の快い旋律を有つ。而してその韻律は微妙で單純で自然である。

最後に彼の詩として忘れてならないことは、彼の範圍が限られてゐることである。彼の交通してゐる自然は湖水地方に限られてゐる。彼の興味も制限せられてゐる。それらの制限のあるにも拘らず、この狹い分野に於て彼は英詩人の中で非常に高く顯著な位置をもつてゐる。テニスンの瑰麗、ブラウニングの怪奇がなくとも、ワアヅワスの單純さは讀者を魅するに十分である。

V　ワアヅワスの詩論

既に述べた通り、ワアヅワスが『抒情詩集』第二版に寄せた序文は、彼の詩論を闡明したものとして興味あるものである。彼の有名な言葉に「善き詩とは力强い感情の自發的流露」であると。この定義は明かに機械的な詩の概念に彈丸を投じたものであつた。

彼が本領とする所は第一に詩語の革新である。卽ちポープ等が使用し來つたかの徒らに誇張に陷り、虛飾の末技に走つた不自然な詩語を打破し、最も平易な日常の言葉を使用することである。彼はいふ、『散文も韻文の間には何等根本的の差別があるのではなく、又あるべき筈ない。もし眞正の趣味と純雅な感情とを以て字句を選するならば、それ丈で既に[illegible]律を加との間に差別を生ずるのであ[illegible]るに於ては通常語との相異は益々十分で、苟くも理解ある人は不服を稱へないであらう。この相異の外に何の差別を要しよう。故に私は通常詩語と稱するものをば力排斥し、普通一般の言語を標準としてなるべくこれを採用しようと思ふ』と。この主張は反動の餘りに出たものであるので稍過不及の憾があり、コウルリッヂも『文學的生涯』でこの說の不完全なことを示してゐるが、從來の因襲的詩語を詩壇より一掃するためには缺くべからざる鐵槌であつた。

第二の本領は詩材の革新である。從來の詩人が題材としたのは、臺閣市井等の俗事であつたが、彼はこれをてゝ卑しい田園生活等の根本的普遍的興味の中に題目を見出した。『マイケル』の如きはその好例である。彼は己の所信を次の如く語つてゐる。

『これらの詩の中に提供せられた主要な目的は、日

生活より事件と狀態とを選び、なるべく人々の實際に用ゆる言葉を選んで、遍くこれらを叙述し、もしくは描寫するにある。同時に、想像の色彩を之に蒙らしめ、それによつて平凡の事物をして心に異常な光景を呈するに至らしめるにある。更にまた其等の中に眞に虚飾的でない吾々の本性の原則を探る事によつて興味あらしめるにある。概して卑しい田園の生活を選んだのは、そこでは人間の眞情が圓熟の境に達し、束縛を受けることが少い。平明にして力ある言葉となつて現はれるに一層よき所であるからである。また田園生活にあつては吾等の根本的感情が單純の狀態に於て存し、從つて、これを一層精確に考察し、一層强く心に傳達することが出來るからである。また田園生活の習俗はこれらの根本感情に起因するものが多く、且つ田園の職業の必然性から、それらは解するに易い變遷が少ないからである。最後に田園生活にあつては、人間の情熱が自然界の美しい不朽な姿と調和してゐるからである。』

何といふ堂々たる革新の宣言ではないか。この新しい試みをわが國の詩歌に譬へるならば(形式上から)、ワアヅワス以前の詩が和歌であるとすれば、彼の詩は正しく俳句のやうなものである(本質的の比較的ではないが)。かの文辭の技巧的改良を以て能とし、普通の事物を普通の辭で言ひ現すことを非難し、ありふれた語句を詩に用ゐてはならぬとしてゐる過去の詩人達の說に對して、ワアヅワスが屢々用ゐてゐる最も簡單な詩句――「山の端添うて動く星の光」――といふやうな詩句は、幾多の華やかな記述に優ることが數倍であることを證明して餘りあるではないか。

かやうに詩語の革新と詩材の革新、それに內容に於ては想像力を解し、言語を詩化するといふ想像的寫實主義をとつた。彼の詩はこれらの主義を體現したもので、內容的、自然的、民主的であることは正しく近代自然主義の先驅者であることを示し、ルソーの思想から如何に多くの影響を受けてゐるかゞ容易に推測し得られる。

VI　ワアヅワスの自然愛

『ドラシイが、ワアヅワスの書齋をと來客に訪ねられた時、『兄の書齋は野外です』と答へた程、ワアヅワスは自然

欠

あつた。彼はその當時を回想していつてゐる。

『ワーヅワース信者に取りては佐伯町は實に滿目悉くワーヅワースの詩編其物の感があつたのである。山に富み溪流に富み溪谷の奥に小村落あり、村落老いて物語多く實にワーヅワース信者をして「マイケル」の二三は此處彼處に轉つて居さうに思はしめた位である。斯る場所に在て日夕ワーヅワースの詩編に夢中になつて居た余が如何程までワーヅワースの感化を受けたかは當時の余の「日記」が說明して居る。今其の二三條を引く。

人若し我に向て汝が文學者詩人としての目的は何ぞやと問はゞ我れ答ふるに窮せざる也。

曰く此の獨立の靈が知り能ふ丈け、觀得る丈け、感じ得る丈けをありのまゝに筆にのばすにあるのみ。

然り余は獨立にして自由なる一個の靈なり。當に自由に觀、自由に感じ、自由に現すべし。（以下中略）

以上は明治二十六年十二月二十日より末日までの日記中より拔いたものであるが其後一年餘り過ぎて余は自から何を書かんと試に題材を選み記したるものを見る

守り。

◎[illegible]より木立村の間を渡す舟子。

◎十二段（山名）の山腹にて逢ひし老樵夫。

◎こじき紀州（人名）

而て「日記」の一節に曰く『余は此の一個の人間を思ふ時は同情に堪へぬなり』と。以て如何で余がライダルの詩人に動かされて居たかゞ解るだらうと思ふ。

既にワーヅワースの信者である限り、余は自然を離れてたゞ世間の人間を思ふことは出來なかつた。人間と相呼應する神祕にして美妙なる自然界に於ける人間なればこそ平凡境に於ける平凡人の一生は極めて大なる事實として余に現はれたのである。

其處で豐後に、滯在中五六年の後、余は初めて『源叔父』なる小說を作り其主人公の一人は乞食兒紀州であつたのである。

無論余は後年、ツルゲーネフも讀み、トルストーイも讀み、モーパッサンも嚼りて其感化を受けたには相違

欠

ないが、以上の所說に依りて余は遂にワーヅワースの流を掬んでそれを信じて、それに依つてたつた一人たることを證明して餘りあると思ふ。』――『不可思議なる大自然』（ワーヅワースの自然主義と余）――

この一文は、島村抱月の『文藝上の自然主義』なる論文に於て、ワアヅワスが主義と名のつかぬ自然主義の元祖であると評したのを見て、獨歩は自からも『遂にライダルの谷間から流れ出た自然主義の流を掬んだのか』と領いて書いたもので、彼がワアヅワスから受けた感化を最も如實に語つてゐるものである。

獨歩の自然觀が一面ツルゲネフの影響と共にワアヅワスによつて自然愛を開眼せられたことは [illegible] の一篇でも詳細に覓月してゐるし、この間の消息は [illegible] 異』、『森に入 [illegible] 山林に自由存す』等の詩が、一 [illegible] に物語つてゐ [illegible] が自 [illegible] 對する熱愛は、終に北 [illegible] 空知川の邊 [illegible] しめ [illegible] く彼はワイ川畔の自 [illegible] を以て任じ [illegible] した [illegible]。

彼の初期の作品は多く自然を描いたもので、多くワアヅワスの影響を受けてゐる。中期の作なる『牛肉と馬鈴薯』や『岡本の手紙』の中にある叫び――人生の不思議に驚き、自然の神祕に驚きたいといふ叫びも、ワアヅワスの精神を受けたものである。また『二老人』、『竹の木戸』、『忘れ得ぬ人々』の如き作に見るやうに、平凡人の平凡な生活の中に人生の眞味を感得し、不可思議の運命を痛感する彼の心持もやはりワアヅワスから受けたものである。兩者には性格の相異はあるが、兎も角、獨歩はその心持に於てワアヅワスに似てゐる點があるので、彼を日本のワアヅワスといつても差支へなからう。

IV 結論

ワアヅワスは先天的に東洋化した心の詩人であつた。ヨーロッパに於て「自然に [illegible] 」といふ叫びが起り、殊に英國に自然詩人が擧出し [illegible] 運動したことは彼等が無意識の中にも東洋の文化に [illegible] 運動である。この意味に於て、ワア [illegible] 潮の第一頁を書いた [illegible] の先驅で [illegible] いはれ [illegible] は新鮮な眼で物象 [illegible] めた [illegible] 者であつ [illegible] この點が自然を

欠

た詩人であつた。彼が時代の潮流に棹し乍も、他の詩人の如く過激に走らず、よく調和を保ち、天職を全うし得て、一世を指導する偉大な感化力となり得たことは、一面には彼の境遇が比較的幸運であつたと共に、自己に對する賢明な批評家であつた彼が、よく自然に隨順し、謙遜に忠實に努力して來た自己訓練の賜物であつた。

ワアヅワスの多くの詩に無上の功績を讓ることは出來ない。然し彼の純眞なる詩の大部分と、彼が文學に與へた新しい傾向と見識とを見逃してはならぬ。彼の藝術の單純と力强さ、深き思想、濃かな情緒、及び入念なる洗煉は遠くアメリカのブライアントやエマスン等にも感化を及ぼした。彼は沙翁、ミルトン以來の最大の詩人である。成程テニスンとブラウニングとは彼の名聲を壓倒した。然しこれは彼等がその作にワアヅワス特有の光を甚だしく投げ込んだからにすぎぬ。ロオレンスの如きは彼をテニスン以上だと評した。世界の思想に根本的永久的の要素を附け加へ、自分と人間とを見る新しい方法を與へ、人生に調和と慰藉と希望とを增したのはわがワアヅワスであつた。彼は忘れてゐた「母なる大地」へ眼を覺ましてくれた先驅者であつた。かくして彼の眞價は益々認められつゝある。

汝のはミルトンの鋭く透徹せる音樂ではない、
シェイクスピアの雲なき、果しなき人間觀ではない。
シェリイの神々しい巔の上の薔薇の閃きでもない。
また、コウルリッヂの知つた魔の薄光でもない。

汝がもたず、汝の仲間がもつたすべてのものを
大いに償ひ得る何物を汝はもつてゐたか？
運動と火、輝く目的に至る迅速な手段であつたか？
汝は疲れた足のために、休息の賜物をもつてゐた。

シェリイの燦爛たる光輝か、雷廷の靄から、
バイロンの嵐雨の忿怒、嵐の狂燥から、
人々は汝に向つて見出した——疾風と火焰、
崩れる天の墜ぎでなくて、地上の平和を。

しかも忘川の邊に咲く香なき花、
蒼白めて萎れ、枯れ果つる平和ではない。

欠

その平和の名はまた歓喜と力、
明察と愛である、これらは平和の一部であるから。
——ワアッワスの墓——ウトスン『ワアッワスの墓』——

參考書目

ワアヅワスに關する參考書は極めて多い。玆では詩人歿後に於ける主要な刊行書のみを掲げる。一般の英文學史の評傳は略す。＊は特に重要な文獻である。

I. 詩集

(A) 全集

Poetical Works, with a Memoir by J. R. Lowell. 7 vols. Little, Brown 1857. re-issued in 1880.

* —— Moxon. London. 6 vols. 1857. (Fenwick notes を初めて收めてある)

—— (The Centenary Edition). London. 1870, 1881, 1882.

—— Ed. W. M. Rossetti. London. 1870.

* —— Ed. W. Knight. 8 vols. Edinburgh. 1882-6.

* Complete Poetical Works. Ed. J. Morley (Glove Edition). Macmillan. 18[illegible]

(一般の研究者には最も便利な一卷物で編者の序文は一讀の價値がある)

* Poetical Works. Ed. E. Dowden (Aldine Edition). 7 vols. Bell (London). 1892-3. (學究的にして同情に充ちた傳記を添へてある)

—— Ed. T. Hutchinson. 5 vols. 1895.

* Poetical and Prose Works. Ed. W. Knight. (Eversley Edition). 16 vols. Macmillan. 1896. (傳記散文集ドラシイの日記を併せ收めてある最も包括的にして權威ある刊本)

Poems. Ed. T. Hutchinson. 2 vols. 1897.

* Poetical Works. Ed. T. Hutchinson. (Oxford Edition). 1904.

Complete Poetical Works. Ed. A. J. George. (Cambridge Edition) Houghton Mifflin. 1904.

—— Ed. N. C. Smith. 3 vols. London. 1908.

Poetical Works, with an Introduction by E. Dowden. 1910.

(B) 選集

Poems. Ed. R. A. Willmott. Routledge. 1859.

Select Poetical Works. 2 vols. Tauchnitz. 1864.

○ Poems. Ed. Matthew Arnold. (Golden Treasury Series). Macmillan. 1879.

(新しい評價を以てすれば二三重要な詩も省いてあるが、今日迄の選集の内で調範とせられてゐる程の定評あり、權威あるもの。その序文は『批評論』(第二卷)の中にも轉載してある

名篇)

Selections. Ed. J. S. Fletcher. London. 1883.

—— Ed. W. Knight and other members of the Wordsworth Society. Kegan Paul. 1888.

—— Ed. A. J. George. Heath (Boston). 1889.

Select Poems. Ed. W. J. Rolfe. American Book Co., 1889.

* Poems. A selection. Ed. E. Dowden. (Athenæum Press Series). Ginn. 1897. (長文の序說がある)

Selections. Ed. W. T. Webb. Macmillan. 1897.

—— Ed. H. B. Cotterill. Macmillan. 1904. (Lowell のワアヅワス論を收めてある)

* Poems. Ed. W. Knight. Simpkin. 1904.

Select Poems, with an Introduction by H. Morley. (Cassell's National Library) 1905.

Poems. Ed. C. L. Thomson. Cambridge. 1907.

Wordsworth Anthology. Ed. Cobden Anderson. London. 1920.

Poetry and Prose. Ed. D. N. Smith. Clarendon. 1924.

Selections. Ed. B. R. Ward. Ginn. 1925.

The Grasmere Wordswarth. Ed. J. Hawke. Selwyn and Blount. 1926.

其他 The Canturbury Poets (好評あり), Everyman's Library, Nelson's Poets, The Red Letter Poets, Macmillan Pocket Classics, The Helicon Poetry Series, The Riverside Literature Series, King's Treasuries, Little Library 等

(C) 其他のもの

The Prelude. Ed. A. J. George. Heath. 1888.

The Excursion. Ed. M. T. Qinn. Bell. 1897.

The Ecclesiastical Sonnets. Ed. A. F. Patts. Milford. 1923.

* The Prelude. Ed. E. de Sélincourt. Clarendon. 1926. (variorum edition で、草稿の比較研究等一切の研究材料を提供してある)

Lyrical Ballads, with a few other Poems. Noel Douglas. 1926.

II. 散文集

* Prose Works. Ed. A. B. Grosart. 3 vols. Moxon. 1876.

—— Ed. W. Knight. 2 vols. 1888.

Prose Writings. Ed. W. Knight. (The Scott Library) 1893.

Selections. Ed. C. M. Gayley. Ginn.

Wordsworth's Literary Criticism. Ed. N. C. Smith. London. 1905.

Prefaces and Essays on Poetry. Ed. A. J. George. Heath. 1892.

Wordsworth's Guide to the Lake. Ed. Sélincourt. (Oxford Library). 1906.

III. 傳記

* Wordsworth, C. Memoirs. 2 vols. Moxon. 1851. (著者は Bishop of Lincoln の職にあつて詩人の甥に當る)

* Knight, W. Life of Wordsworth. 3 vols. 1889.

—— Letters of Wordsworth Family. 3 vols. 1907.

Hood, E, P. Wm. Wordsworth. London. 1856.

Robinson, H. Crabb. Memoirs. Ed. Sadler. 1869. Ed. E. J. Morley. 1922.

Calvert, G. H. Wordsworth: Biographic, Æsthetic Study. Boston. 1878.

* Myers. F. W. H. Wordsworth. (English Men of Letters). Macmillan. 1881. (最も簡潔にして信頼すべき好評あるもの)

Symington, A. J. Wordsworth. Blackie. 1881.

Sutherland, J. M. Wordsworth. London. 1892.

Wordsworth, D. Recollections of a Tour in Scotland, 1803. Ed. J. C. Shairp. Edinburgh. 1874.

* ——Journals. Ed., W. Knight. 2 vols. 1897.

Yarnall, E. Wordsworth and Coleridge. Macmillan. 1899.

Raleigh, W. A. Wordsworth. Arnold. 1903.

* Legouis, E. La Jeunesse de Wordsworth. Paris. 1896.

* ——The Early Life of Wordsworth, 1770-1798. Tr. J. W. Matthew. Dent. 1897. Revised 1921

* ——Wordsworth and Annette Vallon. Dent. 1922.

* ——Wordsworth in a New Light. Clarendon. 1923.

* Harper, G. M. Wm. Wordsworth, His Life, Works and Influence. Scribners 1916. (次ぎの書ミ共に興味[illegible]實を發見して、詩人の研究に一新光明を齎らしたもの)

* ——Wordsworth's French Daughter. Princeton. 1921.

* Stephen, L. "The Dictionary of National Biography. Oxford. 1908-9. (この中にあるワアヅワスの項[illegible]に足る記述である)

Corkran, A. The Romance of Woman's Influence. 1906. (Dorothy Wordsworth に關する項がある)

Kirlew, M. Famous Sisters of Great Men. 1905.

Maclean, C. M. Dorothy and William Wordsworth. Cambridge. 1927.

Morley. J. Dora Wordsworth : His Book, with portraits & facsimile. Selwyne & Blount. 1925. (詩人の姉に關するもの)

IV. 批評及び解説

(A) 主として詩人に關する評論

* Arnold, Matthew. Essays in Criticism. Second Series. Macmillan. 1888.

* Bagehot, W. Literary Studies. Vol. II. 1879.

Bailey, J. C. The Continuity of Letters. Oxford. 1923

* Bradley, A. C. English Poetry and German Philosophy in the Age of Wordsworth. 1909.

* —— Oxford Lectures on Poetry. Macmillan. 1923.

* Brinton, C. The Political Ideas of the English Romanticists. Oxford. 1926.

Brook, S. A. Theology in the English Poets. Kegan Paul. 1874.

* —— Naturalism in English Poetry. Dent. 1926.

—— Dove Cottage. Macmillan. 1890.

* Brook. S. T. Studies in Poetry. Duckworth. 1907.

Buck, P. M. Social Forces in Modern Literature. Ginn. 1913.

Cain, H. Cobwebs of Criticism. 1883.

* Caird. E. Essays in Literature and Philosophy. Vol. 1.

Caryle. T. Reminiscences. 2 vols. 1881.

Charley. H. T. Authors of England. 1888.

Coleridge, S. T. Biographia Literaria. 2 vols. 1817.

Clark, J. S. A Study of English and American Poets. Scribner's Sons. 1917.

Courthope, W. J. History of English Poetry. Vol. III. Macmillan. 1910.

Davies, T. H. Spiritual Voices in Modern Literature. Doran. 1919.

Dawson, W. J. The Makers of Modern English Literature. 1890.

* De Quincey, T. Memorials. 2 vols. 1891.

* De Vere, A. Essays, Chiefly on Poetry. 2 vols. 1887.

* Dowden, E. Studies in Literature. 1878.

—— New Studies in Literature. 1805.

—— Transcripts and Studies. 1887.

Emerson. R. W. English Traits. 1856.

Fatheringham, J. Wordsworth's Prelude as a Study of Education. 1899.

Fausset, H. Studies in Idealism. Dent. 1923.

* Garrod. H. W. Wordsworth : Lectures and Essays. Oxford. 1922. revised 1927. (レグイやハーパー教授等の新研究に對して批評を加へたもの。研究者の一讀を要す)

Harper, G. M. John Morley & Other Essays, Oxford. 1920

Hazlitt, W. Thed English Poets. 1818.

—— The Spirit of the Age. 1825.

Hearn, L. Interpretations of Literature. vol. 1. Dodd. 1915.

Hoyt. A. S. The Spiritual Message of Modern English Poetry. Macmillan. 1924.

Hudson. H. N. Studies in Wordsworth. 1884.

Hudson, W. H. Wordsworth and His Poetry. Harrap. 1914.

Hutton, R. H. Essays, Theological and Literary. 2 vols. 1871.

Knight, W. Wordsworthiana. 1889.

Lowell, J. R. Among my Books. 1870.

Lynd, R. Books and Authors. 1925.

Macaulay. T. B. Critical and Historical Essays. 1852.

MacDonald, G. The Imagination and Other Essays. Boston. 1883.

Mackie, A. Nature Knowledge in Modern Poetry. 1906.

Magnus, L. A Primer of Wordsworth. 189 .

Malleson, F. A. Holiday Studies of Wordsworth. 1890.

Martin, G. C. Poets of Democracy. Boston. 1917.

Mason, E. T. Personal Traits of British Authors. N.Y. 1885.

Masson, D. Wordsworth, Shelley, Keats, etc. 1875. (詩人の歿死後間もなく書いたもの)

Masson, R. Wordsworth. (The People's Books). Jack. (N. D.)

Morley, J. Studies in Literature. 1997.

Noyes, A. Some Aspects of Modern Poetry. Stokes. 1924.
Park, J. A Greenockian's visit to Wordsworth. 1887.
* Pater. W. H. Appreciations. 1889.
Patterson, A. S. Poets and Preachers 1862.
Powell, A. E. The Romantic Theory of Poetry. Arnold. 1926.
Punch, C. Wordsworth. 1907.
Raleigh, Sir W. A. Wordsworth. 1903.
Rannie, D. Wordsworth and His Circle. 1907.
Reynolds, M. The Treatment of Nature in English Poetry. Chicago. 1909.
Robertson, F. W. Lectures on the Influence of Poetry and Wordsworth. 1906.
Robinson, H. C. Diary, Reminiscences and Correspondence. 1922.
Searle, J. Memoirs of Wordsworth. 1852.
Shairp, J. C. Studies in Poetry and Philosophy. Edinburgh. 1872.
* —— Poetic Interpretation of Nature. Edinburgh. 1877.
—— Aspect of Poetry. Oxford. 1881.
Sneath, E. H. Wordsworth ; Poet of Nature and Poet of Man. Ginn. 1912.
Stephen, Sir. L. Hours in a Library. Vol. II. 1892.
—— Stulies of Biographer. Vol. I. 1898.
Stuart, M. Letters from the Lake Poets. 1889.
Swinbume, A. C. Miscellanies. 1886.
Symonds, A. The Romantic Movement in English Poetry. Constable. 1909.
Taylor, H. Notes from Books. 1849.
Ticknor, G. Life, Letters, and Journals. 2 vols. N. Y. 1909.
Tuckerman, H. T. Thoughts on the Poets. 1446.
Tutin, J. R. An Index to the Animal and Vegetable Kingdoms of Wordsworth. 1892.
Ward, T. H. The English Poets. Vol. VI. Macmillan. 1881.
Whipple, E. D. Literature and Life. 1888.
White, W. H. A Description of the Wordsworth and Coleridge Manuscripts in the possession of Mr. T. N. Longman, 1897.

—— An Examination of the Charge of Apostasy against Wordsworth. 1898.
Winchester, C. T. Wordsworth. (How to Know Him). Bobbs-Merrill. 1916.
Wintrigham. W. H. The Birds of Wordsworth. 1916.

(B) 詩人時代の一般文學史に關するもの

* Herford, C. H. The Age of Wordsworth. (Handbooks of English Literature). Bell. 1897.
* Dowden, E. The French Revolution and English Literature. Macmillan.
Hancock. The French Revolution and the English Poets. Holt

(C) Wordsworth Country に關するもの

Knight, W. The English Lake District as Interpreted in the Poems of Wordsworth. Edinburgh. 18,8.
—— Through the Wordsworth Country. With 56 illustrations of Lake Scenery. Sonnenschein. 1906.
Masson, D. In the Foots of the Poets. 1893.
Rawnsley, H. D. Literary Associations of The English Lakes. 2 vols Glasgow.
Robertson, E. S. Wordsworthshire. An Introduction to the Poet's Country. Chatto & Windus. 1911.

V. 語句索引及び辭書類

Cooper, Lane. A Concordance to the Poems of Wordsworth. Smith. 1911.
Tutin, J. R. The Wordsworth Dictionary of Persons and Places. 1891.

VI. 日本に於ける出版書目

〔注意。*のあるものは近時出版せられたもの。その他は絶版である〕

宮崎八百吉	ヲルズオルス	民友社	明治二十六年
大和田建樹	歐米名家詩集	博文館	明治二十七年
大和田建樹	英米文人傳		明治二十七年
坪内雄藏	英詩文評譯	早稻田大學出版部	明治三十五年
山縣五十雄	英詩研究	言文社	明治三十六年
國木田獨歩	ウヲーズヲースの詩評釋	英學新報社	明治三十七年

（原詩に評釋風の感想を書いたもので、小著ではあるが興味ある本である）

浦瀨白雨	ウオルヅウォルスの詩	隆文館	明治三十八年

（二十一篇の短詩を收めてある。自由な譯し振である）

若月保治	對譯英米名家詩抄	内外出版協會	明治三十八年
西村醉夢	西詩の薫	參文社	明治三十九年
淺野和三郎	英文學史	圖書株式會社	明治四十年
宮藤桃溪 小林蓉園	英米百家詩選	三省堂	明治四十二年
高橋五郎	近世英文學	有朋堂	明治四十二年
片上伸	近代英詩評釋	有朋堂	明治四十二年
同	生の要求と文學	南北社	大正二年
宮崎八百吉	朗吟集	日吉堂	大正三年
櫻井鷗村	英詩評釋	丁未出版社	大正三年
内村鑑三 畔上賢造	平民詩人	警醒社	大正三年
畔上賢造	ウヲルヅヲス詩集	警醒社	大正四年

（主として宗教的な詩を五十七篇收めてある。著者一流の氣力の籠つた譯しぶりである）

ベーター著 田都重治譯	全一生活	不老閣	大正四年
平田禿木	*近代英詩選	アルス	大正五年
鹽谷榮	そゞろあるき	至文堂	大正五年
南日恒太郎	英詩藻鹽草	北星堂	大正五年
生田春月	泰西名詩名譯集	越山堂	大正八年
ストロング著 佐藤清譯	自然詩人ウオーズワス	福音書店	大正九年
横山有策	*文學概論	泰文社	大正十年
日高只一	*英米文藝印象記	新潮社	大正十三年

石川林四郎	*英文學に現れたる花の研究	研究社	大正十三年
小日向定次郎	*英文學史（續篇）	文獻書院	大正十三年
澤村寅次郎	Select Poems of Wordsworth	研究社	大正十四年

（英文學參考書の一篇で可なり詳細な註釋が附してある。非賣品）

鷲山弟三郎	*自然詩人ワズワース	新生堂	大正十五年
厨川白村	最近英詩概論	福永書店	大正十五年
木村秀吉	*心と言葉	厚生閣	大正十五年

著作年表

1793. An Evening Walk. An Epistle in Verse.
Descriptive Sketches in Verse.
1798. Lyrical Ballads, with a few other Poems.
1800. Lyrical Ballads, with other Poems. 2 vols.
1802. Lyrical Ballads, with Pastoral and other Poems. 2 vols.
(アメリカでも同年に上梓せられた)
1805. Lyrical Ballads, with Pastoral and other Poems. 2 vols.
1807. Poems. 2 vols.
1809. Tract on the Convention of Cintra.
1814. The Excursion.
1815. Poems. 2 vols. (first collected edition)
The White Doe of Rylstone.
1816. A Letter to a Friend of Robert Burns.
Thanksgiving Ode.
1818. Two Addresses to the Freeholders of Westmore-land.
1819. Peter Bell, a Tale in Verse. 2d ed., 1819.
The Waggoner, a Poem, to which are added Sonnets.
1820. The River Duddon, a Series of Sonnets; Vaudracour and Julia; and other Poems.
The Miscellaneous Poems. 4 vols.
The Excursion [2d ed.].
1822. Memorials of a Tour on the Continent in 1820.
Ecclesiastical Sketches.
A Description of the Scenery of the Lake. 4th ed., 1823. 5th ed., 1835.
1824. Poetical Works. 4 vols. (アメリカ出版)
1827. Poetical Works. 5 vols. (The Excursion を初めて含む全集)
1828. Poetical Works. (パリに於ける出版)
1831. Selections from the Poems. 2d., ed., 1834.
1832. Poetical Works. 4 vols.
1835(6). Lines written after the death of Charles Lamb.

Yarrow Revisited, and other Poems. 2d ed., 1836. 3d ed., 1839.
1836. The Excursion.
1836-7. Poetical Works. 6 vols. (アメリカに於ける出版)
1838. Sonnets.
1840. Poetical Works. 6 vols.
1842. Poems, Chiefly of Early and Late Years.
1843. Select Pieces.
Lines on Grace Darling. (個人出版)
1844(5). Kendal and Windermere Railway. Two Letters.
1845. Poems. (one volume edition)
1849-50. Poetical Works. 6 vols. (詩人の最後の訂正を經たるもの)
1850. The Prelude. 2d ed., 1851.
888. The Recluse. (詩人の歿後始めて上梓せられた)

定價壹圓七拾錢
郵送料八錢

ワアヅワスス詩集

昭和二年十月廿五日印刷
昭和二年十一月十四日發行

飜譯者　幡谷正雄
發行者　佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地
發行所　新潮社
電話牛込　長一八二四番　八八〇九番　八八〇八番　八八〇七番　八八〇六番
振替東京　一七四二番

東京小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

續刊

ワアヅワス詩集……坪内逍遙解題
ブレイク詩集……吉田絃二郎解題
ブラウニング詩集……野口米次郎解題
バアンズ詩集……日高只一解題
ポオ詩集……吉江喬松解題
ロゼッティ詩集……野口米次郎解題
シェリイ詩集……横山有策解題
キイツ詩集……野口米次郎解題
テニスン詩集……片上伸解題
スキンバアン詩集……横山有策解題
ホヰットマン詩集……野口米次郎解題
バイロン詩集……吉江喬松解題

931
W89
3

終